平成２８年度　文部科学省委託
「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」

私立幼稚園教員等のリフレクティブ・マネジメントを支え高める学校評価実施支援システムに関する研究
―公開保育を活用した自己評価の支援と幼児教育の質の評価のための人材育成の視点から―

平成 29 年 3 月

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

目次

Ⅰ．はじめに 3

Ⅱ．研究の目的 4

Ⅲ．本研究の内容 6

１．私立幼稚園教員等のリフレクティブ・マネジメントの意義 6

２．公開保育を活用した自己評価支援システムの構築 7

（１）公開保育を活用した自己評価支援システムの向上について 7

（２）公開保育後の効果の追跡 17

３． 公開保育を活用した自己評価支援システムとリフレクティブ・マネジメントとの関係性 39

４．評価者育成 41

Ⅳ．まとめ 46

Ⅰ．はじめに

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
理事長　田中　雅道

初夏になると幼稚園の砂場は多くの園児でにぎわいます。ある年長児が砂を高く積んで山を造りトンネルを掘り始めましたが、積んだだけの山にトンネルを掘っても壊れてしまいます。彼は近くにあるこてを見つけ出し、山を丁寧に固め始めました。でも、今度も壊れてしまいます。しばらく様子を見ていた友達が、近くから“さらこな”（乾いた小粒の砂のこと）を持ってきました。少し砂を積んでは“さらこな”をかけ、水分を抜いてからこてで固め、また砂を積んでは“さらこな”を掛ける動作を何度も繰り返し、ついに出来上がった山に立派なトンネルを掘り抜きました。

「問題解決能力」は、問題点をよく観察し、解決方法を推論し、何度も試し、工夫する能力です。この全てが幼稚園の砂場での日々の遊びの中で培われているのです。

新しい幼稚園教育要領が平成３０年度からスタートします。今回の改訂で幼児教育を基盤とする新しい学力観が、小学校・中学校・高等学校と一貫したものとして整理されました。幼児期に育つものは何かをしっかりと検証し、その成果を現場に発信していくことが重要です。全ての幼稚園が良質な教育を子供たちに提供できるよう、それぞれの幼稚園が園に在籍している全ての子供に対して、一人一人の顔を思い浮かべながら、指導計画を作成し、実行していく体制の強化が求められています。現場の教員がカリキュラムをしっかりとマネジメントしていくには、園全体でどのような課題を認識すればいいのか。また、常に自園の課題を追求して、教職員がその課題を共有し、学校関係者と共にその課題を克服していき、よりよい教育を追求するという学校評価本来の課題を、シンプルに実現していくには、どのような内容が充実していなかければならないか。これらの問題は、各園の課題であるとともに本財団の重要な課題であると認識しています。

今年度の委託研究の成果をまとめることが出来ました。本成果は今年度のこの報告で終了するのでなく、各園の質が向上し、全ての子供に対して良質な教育が提供されるよう、たゆまぬ努力を継続していくことがこれからも必要であると考えています。幼稚園教育を基盤としたしっかりとした教育体系が構築されることが、これからも日本が輝き続けるために最も重要な課題であると考えています。

Ⅱ．研究の目的

本研究は、私立幼稚園の協力を得て（公財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構（以下「本財団」という）が私立幼稚園における学校評価の推進のために、公開保育を活用した自己評価実施支援システムの構築と幼児教育の質の向上・評価のための人材育成を図ろうとするものである。

本材団ではこれまで平成２０年度より文部科学省委託「幼児教育の改善・充実調査研究（以下、文科省委託事業とする）」に取り組んでおり、学校評価に対する私立幼稚園の意識や実行の実態を分析する中で平成２２年度文科省委託事業では保育所の第三者評価のような書面上での定量的な評価だけでは、保育所等における保育の質の向上、特に保育のプロセスの質の向上は難しいという結果に至った。そこで、平成２３年度文科省委託事業において第三者評価の手法として公開保育を取り入れ、教育の質の向上、幼稚園教諭等の関係性の改善について研究を行い、第三者の目を通して教育・保育の実践を見ることで園の良さや課題を客観的に認識でき、この手法が有効であることが分かった。しかし、公開保育とその後のカンファレンスだけでは課題の解決は難しく、解決に向けての支援が必要であることが分かった。また、第三者評価の手法としての有効性は評価者の資質に大きく左右され、教育・保育、運営の専門性に加えて対話を促進するファシリテーターとしての専門性が必要であることが明らかになった。

そこで、平成 24 年度文科省委託研究では、評価者に求められる資質として、「教育・保育についての理解」「運営についての理解」「ファシリテーションについての理解」の３つの資質について明らかにし、公開保育を活用した第三者評価の取組を支援する「公開保育コーディネーター」の役割が重要であるという結論に至った。公開保育コーディネーターは公開保育までの準備段階から公開園のサポーターとして、事前研修等において、園の良さや課題を整理し、教職員間で共有する支援を行ったり、公開保育当日はファシリテーターとして参加者全員が公開園がさらに良くなることを願い、質問や意見を述べやすい雰囲気を作ることや公開園の課題についての話合いを深めたりする役割を担う。そして、公開保育の役割として最も重要なことは、公開した園が自園の良さや課題に気付き、意欲的に園の課題を解決し、教育の質の向上を目指す園の風土を醸成することである。本財団では平成 25 年度に公開保育コーディネーター養成講座を創設し、1 年間のカリキュラムの下研修を実施し、基礎資格の認定を行うこととし、平成２５年度から２７年度の間に全国で約２００人のコーディネーターを要請している。

こうした取組は、平成 25 年度及び平成 26 年度の文部科学省委託事業「幼児教育の改善・充実調査研究」において、園の実情を理解した上で諸々の課題を可視化し、その解決等の方向性を示す端緒となるもので、教育の質向上において有効であるとの結論を得ている。しかし、課題も残されている。平成 26 年度の上記事業で実施した公開保育コーディネーターのアンケートにおいて、公開園が公開保育やコーディネーターによる園内研修等の機会を得たとしても、その後の園の教育の質向上の取組は、私立幼稚園の運営等の性格上、園長・主任等の学校評価への認識や、園のリーダーの姿勢に大きく左右されることが明らかになっている。その意味では、学校評価を推進し教育の質向上を図るには、指導者としての資質・能力・力量など、園長や主任・中堅教諭等のリーダーシップが非常に重要である。教師一人一人が自己の力量を増強させ教師としての資質・能力を向上させていくためには、園長等は、

園の目的・目標等の設定や方向性等に係る意志決定や活動はもちろんのこと、プロフェッショナルなファシリテーター・マインドを持って教師の学習を促す組織文化の育成や教師同士を結び付け学習し、協働する組織の形成など、幼稚園等におけるリーダーとしての役割を果たしていくことが期待されている

そこで、平成２７年度の文科省委託事業では自己評価の充実や学校関係者評価の活性化を考慮しながら、コーディネーターを活用した第三者評価を実施するとともに、リーダーとしての園長等の資質向上につながるカリキュラムを構築し研修を実施した。園長・リーダー研修後のアンケートやレポートからは、研修に参加したことにより、教育を語るためにより深く子供を理解し、園の理念の現代化を図る等、教育のリーダーとしての役割の自覚や、園の現状を振り返ることによる新たな課題の発見等が報告されている。また、教職員間のコミュニケーションや合意形成など、園内の連携をより良くするための話合いや合意形成の手法、トップダウンではない新しいリーダー像の模索等、園内研修の基盤である関係作りについても関心が寄せられていた。これらは、教育の質の向上や人材育成等の教育面での課題の解決等の方向性を示す端緒となるものであり、園長・リーダー研修が教育の質向上において有効であることが伺える。しかし、園が今後も自己評価等により教育の実践の質を高めていくには、自己評価の質を高めるための支援システムの構築や自己評価の重要な要素である教員相互の振り返りと相互の振り返りによって共有された課題に対して個々に内省し、それを再度共有し、実践の質を高めていくことが重要であろう。

Ⅲ．本研究の内容

１．私立幼稚園教員等のリフレクティブ・マネジメントの意義

これまで本財団が推進してきた公開保育により、実践の質について一定の成果が得られるものの、それを更に高めるためには、自己評価自体の質を高めることが必要になってくる。自己評価が十分に機能していなければ、公開保育を実施しても具体的な課題の解決や実践の質の更なる向上につながらないのである。私立幼稚園においては、建学の精神や幼稚園教育要領に基づき、幼児の姿や就学後の状況、家庭や地域の現状等を踏まえて教育課程を編成、実施し、評価、改善を図っているが、このような一連のＰＤＣＡサイクルを確立することが重要であり、その流れを評価していかなければならない。

実践の質を高めるためには、公開保育の実効性を担保すると共に自己評価の質を高めるための支援システムの構築が必須である。そのためには自己評価の重要な要素となるであろう教員等によるリフレクションを支え高めていくための手立てが必要である。リフレクションを、教員等が自己の教育的行為を実践全体に結び付けながら振り返り、内省を行うことと捉えた場合、それは過去を顧みることだけではなく、将来を見越し今後の実践をより充実させる教員等の学びや成長につながっていくものでなければならない。リフレクションの基本は、教員等が自らの教育実践を内省する個人内対話が深まることで実践の質は高まっていくことである。また、実践上、様々な課題に出会った際、教員等の個人内対話のみならず、同僚等との対話による議論を通じて同僚等と課題を共有しながら協働して、新たな実践に導いていくことが重要である。

こうした個人内対話と他者との対話の両面を促進させ、より深いリフレクションが行われるようにする営みが、リフレクティブ・マネジメントである。このようなリフレクティブ・マネジメントを教員等一人一人が意識しながら内省と対話を繰り返す中で、リフレクションが自己評価を通して生かされることは、組織としての成長にもつながっていく。さらには、幼稚園等の教育に関わる家庭や地域にも園での課題をオープンにし、それらと協働してより質の高い実践を創り上げていくことも重要である。

教員等によるリフレクションやリフレクティブ・マネジメントを支え高め、自己評価の質を向上させるためには、これまで本財団が実施してきた公開保育を活用した自己評価の支援のみならず、リフレクティブ・マネジメントを支え高めるリフレクティブ・マネージャーの育成が重要である。組織としてのリフレクションの中核となるリフレクティブ・マネージャーの育成は、いわゆる「内省的実践家」の育成にもつながると考えられる。

そこで、本財団では、公開保育を活用した自己評価の実施支援や質向上という観点から、公開保育を活用した自己評価支援システムの構築を行うこととした。具体的には、公開保育コーディネーターハンドブックの改訂や公開保育コーディネーター養成カリキュラムの検討、公開保育コーディネーターの質向上のための研修を実施した。さらには、公開保育を活用した自己評価支援システムが、その後公開保育を実施した幼稚園等にどのような効果を与えているかといった追跡調査を実施することにより、リフレクティブ・マネジメントやリフレクティブ・マネージャーの育成といった課題についても検討を行った。これらの取組は、自律的に学習・成長する組織体としての幼稚園等の構想につながるものと考えている。

２．公開保育を活用した自己評価支援システムの構築

（１）公開保育を活用した自己評価支援システムの向上について

私立幼稚園としての理念や地域事情に配慮しつつ、幼稚園教育要領の理念に基づいた教育活動や運営等や、自園の教育内容の質向上を目指すにあたり、園内研修は欠かすことのできないものである。本財団はその研修の一環として公開保育を実施し、外部の視点を導入することによって、自園の良さや課題の発見など教育・保育のプロセスの質の向上を目指すことを目的に自己評価支援を図ってきた。このシステムにおいて特徴的なことが、支援者としての公開保育コーディネーターの存在である。近隣の私立幼稚園が協力して公開保育を行うことにより公開園の教育の質向上につなげるためには、公開保育の形式的な実施や、外部による細部の指摘に終始するものであってはならない。公開保育後、当日の実践を中心に、参加者が感じた公開園の良さを互いに共有したり、参加者が疑問に感じたことや公開園が課題と考えている点について参加者と意見交換をしたりすることにより、公開園の優れた取組や改善の方向性が明らかになり、それを教育の質の向上につなげることが肝心である。個々の保育者が同僚との関係に支えられる中で、意欲的に園の課題を解決し、教育の質向上を目指そうとする園の風土の醸成をするための支援者として、園に寄り添い共に学ぶ存在が公開保育コーディネーターであることは言うまでもない。

本財団では、各園の自己評価を支援する公開保育コーディネーターの養成を平成２５年度より始め、今年度で４期目の養成講座を実施した。養成を重ねることにより、また実際にこのシステムにて公開保育を実施する園が増えてきたことから、現在、公開保育コーディネーターとしての資質や技量そのものにも質の向上が求められる段階にある。

そのため、以下の項目においてこのシステム全体の質向上を検討してきた。

①『公開保育コーディネーターハンドブック』の改訂

『公開保育コーディネーターハンドブック』は、公開園を支え、共に学び合う存在としての公開保育コーディネーターの役割や資質について、また「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」全体について記載したものであるが、よりわかりやすく、具体的な内容とするために検討を重ねてきた。特に、公開保育コーディネーターが支援をすることにより園内研修が深まる意義をより明確にし、各園の良さを十分に理解し合いながら、目前の子供たちの姿から実践を考え、振り返りを丁寧にすることが教育・保育の質の向上につながるものであることをより具体的に記載するよう努めた。また、実際の写真等を加えることにより、研修全体のイメージがつかみやすいように配慮し、全国の幼児教育施設が園内研修においてこのシステムを活用しやすいものに改訂した。

②　公開保育コーディネーターの質の向上

●公開保育コーディネーター養成講座（第４期）

高い専門性が求められる公開保育コーディネーターを全国各地に養成するために、本財団では、平成 25 年度より、公開保育コーディネーター養成講座を開設し、1 年間の研修プログラムを修了した受講者に対し、公開保育コーディネーターの認定証を発行している。

平成 27 年度末までに、1 期生から 3 期生合わせて全国で 181 名の公開保育コーディネー

ターが誕生し、各地で活動を行ってきた。しかし、今後、公開保育を活用した自己評価支援システムを広く定着させると共に、永続的な取組のためには、公開保育コーディネーターの更なる養成が必要である。そこで、平成 28 年度においても、公開保育コーディネーター養成講座（第 4 期）を実施し、人材の育成に取り組んできた。

講座プログラムは、初回と最終回（まとめ）は全員が参加する共通の学びの場とし、その間に各地区で行う公開保育とワークショップを実践の場とした。

回数	開催地	内容
養成講座Ⅰ	東京	全体講義とワークショップ
養成講座Ⅱ	各地区	公開保育
養成講座Ⅲ	各地区	ワークショップ
養成講座Ⅳ	東京	まとめ

※各地区……北海道、東北、関東、東京、神奈川、東海北陸、近畿・大阪、中国、四国、九州

A　公開保育コーディネーター「養成講座Ⅰ」（全体講義とワークショップ）

＜開催日時＞

平成 28 年 6 月 3 日　　11 時～17 時

＜開催場所＞

砂防会館（東京都千代田区）

＜参加者＞

4 期生 49 名

＜講師＞

岡健（大妻女子大学家政学部児童学科教授）

安達譲（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構　研究研修専門委員）

＜プログラム＞

①趣旨説明

はじめに、公教育を担う私立幼稚園として、独自性を担保しつつも独善に陥ることのないよう、教育の質向上を各園が自力で図っていく学校評価のプロセスを支援するシステムについて説明した。また、公開保育コーディネーターには、「教育・保育についての理解」「運営についての理解」「ファシリテーションについての理解と進行」という資質が求められること、さらに、公開保育においては、自園の良さや課題を知ること、同僚性が育まれる契機となること、課題を解決する方向性が明らかになること等が大切であるという解説があった。その後、公開保育のプロセス（STEP）ごとに、ポイントを明示した。

STEP 1	事前訪問	園長・主任等へのヒアリング、園の課題や改善の方向性を焦点化する
STEP 2	事前研修	教職員による事前ワーク、園の良さと課題を整理し共有する

STEP 3	準備	自らの課題をオープンにした「問いづくり」、公開保育の計画・準備
STEP 4	公開保育当日	参加者からのフィードバック、分科会の進め方、ファシリテーターとしての心構え
STEP 5	振り返り	公開保育を踏まえた課題の整理と共有、今後の方向性に向けての合意形成

②事前講義

学校評価の考え方、保育論、質向上へ向けた園内研修、ファシリテーション等、公開保育コーディネーターとして必要な知識、理論、技術について学ぶ機会とした。主なポイントは、以下の通りである。

・質の向上と第三者評価について
・全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が志向する第三者評価とは
・文部科学省「学校の第三者評価のガイドライン」
・援助論における子供の育ちと大人の意図
・教授論における子供の育ちと大人の意図
・実態を踏まえたＰＤＣＡサイクルの構築
・質向上へ向けた園内研修の方向性
・新しい公開保育を使った園内研修・各ＳＴＥＰの説明
・ファシリテーションにおけるポイント
・田の字法とは？田の字法から見えてくるものについて
・問いづくりとは？
・公開保育直後の協議会について
・公開保育後の振り返り

③ワークショップ

自園の公開保育の経験の有無、他園の公開保育においてファシリテーションの経験の有無によって、4 つのグループに分かれ、経験値のレベル別にグループワークを実施した。ワークの内容は、今回の講義で「理解できた点」「理解できない点や不安な点」を付箋に書き出し、各自の意見をグループ内で整理して共有する作業を行った。最後に、グループごとに「ここが訊きたい」という質問事項を選んで発表した。

④講義

各グループから出た質問を受けて、講義を行った。「ファシリテーティブな関わり方」「コーディネーターとしての客観性」「問いづくりのプロセス」などが話題となった。

Ｂ　公開保育コーディネーター「養成講座Ⅱ」(公開保育)・「養成講座Ⅲ」(ワークショップ)

養成講座受講者には、各地区において「公開保育に参加し STEP4 を経験すること」「公開保育後に受講者としての振り返りワークに参加」を必須のプログラムとしている。

平成 28 年度の各地区の実施状況

地区	内容	実施日	開催場所
北海道	公開保育	平成 28 年 10 月 28 日	ふしこ幼稚園（北海道）
	ワークショップ	平成 28 年 11 月 11 日	ふしこ幼稚園（北海道）
東北	公開保育	平成 28 年 8 月 19 日	福島わかば幼稚園（福島県）
	ワークショップ	平成 28 年 8 月 20 日	福島県文化センター（福島県）
関東	公開保育	平成 28 年 8 月 24 日	大成幼稚園（埼玉県）
	ワークショップ	平成 28 年 9 月 30 日	大成幼稚園（埼玉県）
東京	公開保育	平成 28 年 12 月 3 日	鶯谷さくら幼稚園（東京都）
	ワークショップ	平成 28 年 12 月 20 日	鶯谷さくら幼稚園（東京都）
神奈川	公開保育	平成 28 年 11 月 5 日	鴨居幼稚園（神奈川県）
	ワークショップ	平成 28 年 11 月 8 日	鴨居幼稚園（神奈川県）
東海北陸	公開保育	平成 28 年 10 月 21 日	堀川幼稚園（富山県）
	ワークショップ	平成 28 年 11 月 5 日	堀川幼稚園（富山県）
近畿・大阪	公開保育	平成 28 年 7 月 29 日	名草幼稚園（和歌山県）
	ワークショップ	平成 28 年 8 月 19 日	名草幼稚園（和歌山県）
中国	公開保育	平成 28 年 8 月 23 日	深川幼稚園・真珠幼稚園（山口県）
	ワークショップ	平成 28 年 11 月 8 日	山口県私立幼稚園協会
四国	公開保育	平成 29 年 1 月 25 日	恩田幼稚園（山口県）
	ワークショップ	平成 29 年 1 月 25 日	恩田幼稚園（山口県）
九州	公開保育	平成 29 年 1 月 21 日	にじのはねこども園（佐賀県）
	ワークショップ	平成 29 年 2 月 27 日	にじのはねこども園（佐賀県）

①公開保育の実施

各地区において、公開保育コーディネーターが、公開園と共に STEP1 から STEP5 まで実施する。養成講座受講者は、STEP4（公開保育当日）と STEP5（事後の振り返りのワークショップ）に参加することが必要だが、STEP1、STEP2、STEP3 についても、状況に応じて参加したり、コーディネーター養成 1 期生から 3 期生等によりレクチャーを受ける。

【実施例（北海道）】

平成 28 年度の養成講座受講者　2 名

公開園　ふしこ幼稚園

・STEP2（事前研修）

＜開催日時＞

平成 28 年 8 月 26 日　15 時 30 分～17 時 30 分

＜参加者＞

公開保育コーディネーター1 名、受講者 2 名、ふしこ幼稚園の教職員 10 名

＜内容＞

コーディネーターより、公開保育を活用した自己評価支援システムの趣旨説明をした後、ふしこ幼稚園の教員に学年別（年長・年中・年少）のグループに分かれてもらい、ワークショップを行った。

各グループにファシリテーターとしてコーディネーターと受講者が入り、付箋を活用して、「現在取り組めていること」「現在の具体的課題」「不安なこと・障壁」「目標（自分として・園として）」の 4 つのテーマについて、話合いを進めた。「子供が生き生きと活動している」といった良さの一方で、「子供の主体性が足りない」「活動をやらされている感がある」といった課題も浮き彫りになり、保育者の関わりや環境についての意見を出し合った。

・STEP4（公開保育当日）

＜開催日時＞

平成 28 年 10 月 28 日　9 時～15 時

＜参加者＞

公開保育コーディネーター1 名、受講者 2 名、ふしこ幼稚園の教職員全員

外部の参加者 70 名程度

＜スケジュール＞

9 時 20 分～9 時 30 分　　オリエンテーション

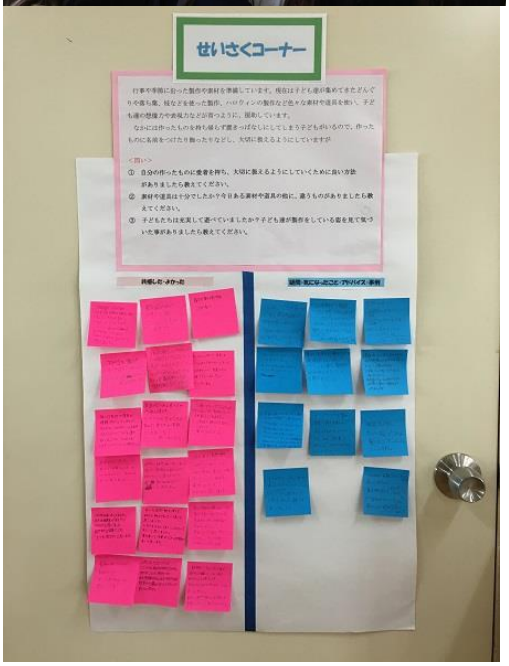
9 時 30 分～11 時 15 分　公開保育

11 時 30 分～12 時　　全体会（公開園より本日の実践についての発表）

13 時～14 時 30 分　　分科会

14 時 30 分～15 時　　全体会（分科会報告とまとめ）

＜内容＞



はじめにオリエンテーションの場を設け、参加者全員に、公開保育の趣旨と一日の流れを説明するとともに、出し合った多くの意見や感想が話合いの材料になり、教育の質向上につながるということについて理解してもらった。

コーナー活動に力を入れている園だったため、公開保育においては、設定されたコーナーごとに「問い」を示し、参加者から意見や感想を募った。例えば、製作コーナーでは、「様々な素材や道具が種類ごとにわかりやすく分けられているので、子供たちが取り出しやすい」「子供たちが自分で集めた自然の素材があるのがよい」などの意見がある一方、「実現したことの喜びにもっと寄り添う援助があってもいいのではないか」「製作コーナーで作ったものを他の遊びにつなげていける仕掛けがあると、より主体性のある遊びになるのではないか」等の意見もあった。

午後の分科会では、「問い」を設定したコーナー別にグループとなり、参加者を交えての意見交換を行った。公開保育で貼られた付箋を基にテーマを絞って分科会を進めたので、参加者からも積極的な発言があり、公開園にとって実りのある協議となった。

②振り返りのワークショップ

各地区において、公開保育後、振り返りのワークショップを行った。公開保育コーディネーターが中心になって進め、養成講座受講者は、ファシリテーターとして話合いを支えたり、参加者として見学するなどして、実践の場を通して学びを深めた。平成 28 年度の内容は、以下の通りである。

地区名	講座内容
北海道	STEP5 を実際に行い、最後に受講者として、公開保育コーディネーターの役割の振り返りをする。
東北	STEP1 の内容を基に、自分であったらどのように聞き出すのか、実際に前に立ってファシリテートし、講師の岡健大妻女子大学教授から指導を受ける。また、STEP1 が肝心であることの紐解きを解説する。
関東	公開保育コーディネーターが行う STEP5 を見学する。
東京	公開保育の協議を振り返る。具体的には園の教員と一緒に、協議で出し合ったポストイットを新たな視点でまとめ直す。
神奈川	講師を入れ、ポストイットを使ってマトリックスで振り返り、それぞれの学

	年ごとに話内容を全員でシェアをした。
東海北陸	STEP5 に参加し、公開保育で出た課題やその解決策について議論するとともに、公開保育コーディネーターの役割について学ぶ。
近畿・大阪	STEP5 を実施し、公開保育で出た課題や問題点について議論する。
中国	公開保育コーディネーターが行う STEP5 を見学する。
四国	公開保育コーディネーターが行う STEP5 を見学する。
九州	受講者として、公開保育コーディネーターの役割について振り返りをする。

C　公開保育コーディネーター「養成講座Ⅳ」（まとめ）

＜開催日時＞

平成 29 年 2 月 15 日　　11 時～17 時

＜開催場所＞

アルカディア市ヶ谷私学会館（東京都千代田区）

＜参加者＞

4 期生 49 名

＜講師＞

岡健（大妻女子大学家政学部児童学科教授）

秦賢志（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構　研究研修協力委員）

鮎川正（石川県・木の花幼稚園園長）

＜プログラム＞

①実践発表

発表者　鮎川正（石川県・木の花幼稚園園長）

　　波岡千穂（富山県・堀川幼稚園副園長）

平成 28 年度の東海北陸地区における実践について、公開保育コーディネーターとしての立場と、公開園として教育の質向上に取り組んだ立場より報告があり、生の声を通して学ぶ機会とした。コーディネーターからは、STEP1 と STEP2 の大切さ、STEP3 の「問いづくり」のプロセス、STEP5 の「振り返り」における難しさなどの解説があった。また、公開園としては、話合いの場を通して、若い保育者にも「実践を語ろうとする」姿が見られるようになり、成長を感じることができたという報告があった。

②グループワーク

事前に提出してもらったレポートの記述を基に、参加者が疑問に感じていることについてポイントを絞って解説した後、グループワークに進んだ。

グループワークは、STEP1 から STEP6 のうち、特にどの STEP を学びたいかによってグループ分けをし、公開保育コーディネーターハンドブック（平成 28 年度改訂版）の該当部分を読み合うワークを行った。重要と思われる部分、わかりにくい部分、もっと知りたい部分を付箋に書き出して発表し合い、その後、全体で共有する時間をもった。

③講義
講師が実践例を紹介しながら、田の字ワークの読み解きや問いづくりのポイント、さらに、STEP5 の「振り返り」と STEP6 の「報告書」の記載について、解説した。

●公開保育コーディネーターフォローアップ研修

公開保育を活用した自己評価支援システムが機能するためには、養成講座を修了した公開保育コーディネーターの働きが大切である。そのためには、実践で経験を積むだけではなく、共通の学びの場を継続的に設ける必要がある。そこで、平成 28 年度は、すでに公開保育コーディネーターとして認定を受けている者のキャリアアップを目的に、フォローアップ研修を 2 回実施し、コーディネーター全体の資質を底上げする取組を行った。

第 1 回フォローアップ研修
＜開催日時＞
平成 28 年 8 月 18 日　　9 時 30 分～11 時 30 分
＜開催場所＞
東京家政大学板橋キャンパス
＜参加者＞
平成 25 年度から平成 27 年度の 3 年間に公開保育コーディネーター養成講座を受講し、公開保育コーディネーターの認定を受けた 1 期生から 3 期生のうち、希望者 34 名。
＜講師＞
秦賢志（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構　研究研修協力委員）

＜概要＞
公開保育においては、参加者に実践のどこを見てほしいのか、参加者から何についてフィードバックがほしいのか、その視点を明文化した「問い」を作成するプロセスが重要である。「問い」を立てる主体はあくまでも公開園であり、公開保育コーディネーターが公開園の教職員とともに「問いづくり」に関わる必要がある。ただ、実践を経験した公開保育コーディネーターからは、「問いづくりが難しい」という声が多く挙がっていた。そこで、教育の質向上に結び付く公開保育となるよう、より適切な「問いづくり」について学ぶ研修を行うことにした。定員は 30 名程度とし、講師が受講者により丁寧に関われるように配慮した。

＜プログラム＞
①講義
以下の 4 点を研修のテーマと定めた。
a　なぜ公開保育に「問い」が必要か。
b　「問い」はどのような構造を持っているか。
c　話合いが深まる「問い」と深まらない「問い」。
d　STEP1 と STEP2 からの「問いづくり」。

各テーマについて、主に以下のような論点で研修を進めた。

a　公開園が自らの良さや課題に気付き、ポジティブに教育の質向上につなげることができる公開保育であるべき。そのためには、参加者に漠然と見てもらうのではなく、保育のどこを見てほしいのか、何を教えてほしいのか、テーマを絞って問い掛けることが必要である。

b　文を構成する要素には、「子供の様子・育ちの姿」「保育者のねらい・願い」「環境構成や手立て」「本日の見通し」「本日の意図」「いまの課題意識」があり、これらを端的にまとめることが必要である。また、最後の問い掛け方にもいくつかの類型があり、欲しいフィードバックを得るためには、「問い」のねらいに合った投げ掛けをしなければならない。

c　漠然過ぎる「問い」、できているか、できていないかの二者択一的な「問い」からは、話合いの深まりを促すようなフィードバックは得られにくい。公開園の取組や悩みをオープンにしつつ、より具体的な「問い」を投げかけることが、話合いの深まりにつながり、教育の質向上に寄与するものとなる。

d　講師の園の事例を紹介しながら、STEP2 から「問いづくり」への流れを確認する。

②個人ワーク（参加者による問いづくり）

事前アンケートによると、受講者 34 名のうち、「問い」を自ら作成した経験があるのは 12 名だけだった。「問いづくり」をサポートするだけではなく、実際に自ら「問いづくり」をしてみないと、「問い」の本質について理解することは難しい。そこで、受講者がそれぞれ、自分の園が公開保育をするという想定で「問いづくり」を行った。できあがった「問い」は、講師が個別に目を通し、マンツーマンで指導する時間を設けた。

③全体振り返り

公開保育のプロセスを通して、子供の姿を基に実践について話し合う風土が醸成されていくことが望ましいことであり、それが、教育の質向上につながる。「問いづくり」は、そのための一つの仕掛けであるというまとめを行った。

第 2 回フォローアップ研修

＜開催日時＞

平成 29 年 2 月 20 日　13 時～16 時

＜開催場所＞

アルカディア市ヶ谷私学会館（東京都千代田区）

＜参加者＞

平成 25 年度から平成 27 年度の 3 年間に公開保育コーディネーター養成講座を受講し、公開保育コーディネーターの認定を受けた 1 期生から 3 期生のうち、希望者 24 名。

＜講師＞

秦賢志（全日本私立幼稚園幼児教育研究機構　研究研修協力委員）

＜概要＞

フォローアップ研修には初参加の公開保育コーディネーターが多かったため、第 1 回と

同様、「問いづくり」を中心に研修を行った。
＜プログラム＞
①講義Ⅰ
公開保育コーディネーターとは評価者や助言者ではなく、公開保育の場を通して、教育の質向上を目指す園の風土の醸成を支援する役割であることを確認した。続いて、第1回と同じく、以下の4点を主なテーマとして研修を進めた。
a　なぜ公開保育に「問い」が必要か。
b　「問い」はどのような構造を持っているか。
c　話合いが深まる「問い」と深まらない「問い」。
d　STEP1とSTEP2からの「問いづくり」。

②講義Ⅱ
参加者には、講座に参加する前に実際に「問い」を作成し、あらかじめ講師に送付してもらうことを事前課題として課した。講義Ⅱでは、受講者全員の「問い」を一つずつスクリーンに映し出し、それに対して講師が解説していくスタイルで進行した。自分以外の公開保育コーディネーターが作成した多くの「問い」を見ながら考える時間を設けることで、よい「問い」・悪い「問い」の比較検討などができ、より実践的な学びとなった。

●まとめ
公開保育を活用した自己評価支援システムにおいては、公開保育コーディネーターの存在が欠かせない。すでに多くのコーディネーターが全国各地で公開保育に関わり、各園の学校評価を支え、教育の質向上に寄与している。ただ、コーディネーターには高い専門性が求められるため、養成講座のカリキュラムもより精査していく必要がある。例えば、各地区で行われている公開保育や振り返りのワークショップの内容もばらつきがあり、一定水準の専門性を身に付けるために、共通の学びのカリキュラムを構築していくことも検討課題となっている。
また、養成講座を修了して公開保育コーディネーターに認定されたとしても、実践の場がなければスキルアップは望めない。公開保育を活用した自己評価システムの有効性を各園に周知し、コーディネーターの活躍の場を増やすことが、継続的な人材育成となり、システム全体の底上げにもつながる。さらに、コーディネーターとしての経験から浮かび上がってくる悩みや課題を丁寧に拾い上げ、実践に即したフォローアップ研修も継続的に行っていく必要がある。

（２）公開保育後の効果の追跡

平成 25 年度から本財団において「公開保育コーディネーター」の養成と、「公開保育コーディネーター」が参画した園内研修と公開保育を活用した教育の質向上の取組がスタートした。

園内研修と公開保育を中心としたステップを終えた直後の実施園からのアンケートでは、この取組に対して、以下のような高い満足度と効果が得られた（本財団の平成 26 年度文部科学省委託研究の報告書を参照)。

そこで今回の研究では、平成 25 年以降に本財団において開発された「公開保育コーディネーターが関わる園内研修と公開保育を組み込んだステップ」を実施した幼稚園や認定こども園について、経年の結果として、この STEP がその後の園運営において、どのような変化をもたらしたのかについて、追跡調査しその結果をまとめることとした。

１．調査対象園数

平成 28 年度 12 月末時点までの４年間において、本財団が把握している全国での実施園数は 53 園であった。

この取組については、公開保育コーディネーターの養成に関わるものと、地区からの要請があって実施したものと、認定こども園としての「第三者評価」として実施したものに分類できるが、この研究では全てを含めデータを集計することとする。

実施した全園についてアンケートを依頼し、50 園から回答を得た（回収率は 94%)。

２．調査の設計と目的

「公開保育コーディネーター」が参画した園内研修と公開保育を中心としたステップを終えた後に、中長期的に幼稚園や認定こども園の変化を把握するために、教育の質向上に関わる視点として、次の５点（設問１～５）をあげた。

各項目（設問）については、総評として「◎…さらによくなった　○…よくなった　△…かわらない　×…悪くなった」という 4 段階の記号を書き込んだ上で、具体的な内容を記述する形式をとった。

また、最後に設問６としてこの仕組み全体について現時点から振り返って、有効な仕組となっているのかについても「設問１～５」と同様な形式で用意した。

設問 1…保育について会話をすること

近年になって国際的な幼児教育の質向上は、保育者がそのクラスを抱え込んでしまうのではなく、自分や自分の担当するクラスについての話題をオープンにして、同じ幼稚園や認定こども園の教員と意見交換や相談を互いにし合える関係構築が重要であると言われ、「同僚性」という表現で表記される。それぞれの組織において、職域においての判断の責任はありつつも、幼児理解については、上司からの上意下達ではなく、幼児に関わる同じ専門家として意見交換できる現場が大切である。

以上のような考えから、最も基本的なこととして、「保育について会話すること」を設問にあげることとして、その後の変化を問うこととした。

設問２…保育について振り返ること

平成 29 年に告示される幼稚園教育要領では、その基本となる考え方の中に、「アクティブ・ラーニング」という概念がある。子供が主体として学ぶことについての視点であるが、このアクティブ・ラーニングにおいての大切なポイントとして、「振り返り」があげられる。

もちろん「学び」の構造は、子供であっても大人であっても同様である。何事もやったままではなく、振り返ることによって「知」は自覚されるものである。また幼稚園や認定こども園という組織の中では、教育・保育を向上させていく仕組として「振り返り」は重要な要素である。この仕組を端的に表したものは「ＰＤＣＡ」サイクル（計画・実行・評価・修正のサイクル）である。この場合の「振り返り」はＰＤＣＡサイクルにおいての「評価」にあたる。

教育・保育という営みにおける振り返りを具体的に述べれば、ＰＤＣＡサイクルを意識化をしているか。職員会等園内の様々な会議において、振り返りを実施しているか。あるいは、週案や保育記録の書き方や書式の見直しなどが行われているか等があげられる。設問２においてはこのような具体例も示しつつ、その後の変化を問うこととした。

設問３…日々の会議等の運営で、園長以外にも、コーディネート的な役割を意識した進行をしているか

会議の進行においては、単なる会議の司会ではなく、コーディネートするという役割が意識されるようになったか。また会議はいつも単に園長にお任せするという意識に変化はあったか。

幼稚園や認定こども園においては、組織の自立や教育の質向上という側面から、主幹教諭やミドル・リーダーが育ってくることが願われている。このような意味からもその後の変化を問うこととした。

具体例として、会議が単に報告の場になっていないか。園長の判断だけに委ねる打ち合わせになっていないか。教育の質向上を意識した会議が運営されているか。園内研修の実施を意識するようになったか等をあげた。

設問４…保育や運営での課題の発見や解決への取組について

園内研修や公開保育を通して取組から見えてきた自園の課題は、この一連のステップにおいて、最終的に解決ができたのかを問うこととした。また更に新しい課題を見つけ出すことができたかは、正に自己評価につながるものである。

経年の変化についてその後の変化を問うこととした。

設問５…園をオープンにすること

設問１とつながる設問である。教育の質を向上させていくためには、それぞれの園が自分の取組を、よさも課題も含めてオープンにしていくことが求められる。

それは「学級やクラスを開く」という意味での「同僚性」から始まり、教師集団としては学年間についても同様である。

更に保護者や地域に対する情報の開示も欠かせない。各園が目指す教育への理解の啓発

や、そこから生まれてくる協働が、各園での教育の質向上させていくために、大切な力となってくる。

設問においては具体的な取組の内容を含めて、その後の変化を問うこととした。

設問６…現時点から振り返って「公開保育と各 STEP」は、各園においてどのような影響があったか。

この設問については自由に記述することとした。

３．調査期間

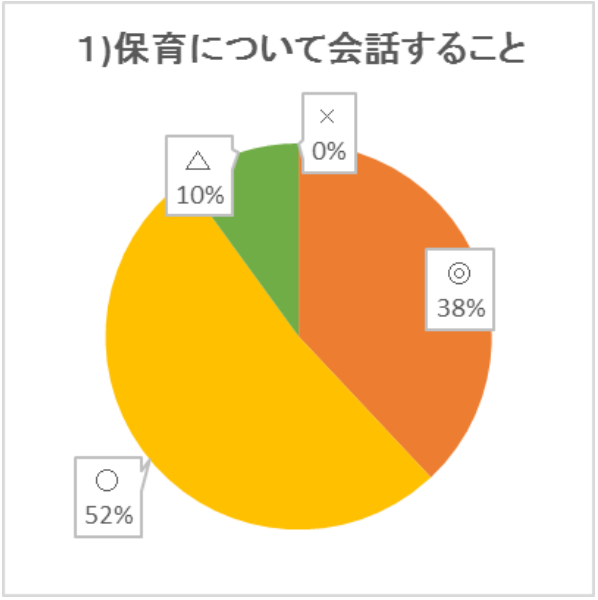
平成 28 年 12 月に調査用紙を各園に郵送し、回答は同 12 月中にファックスにて回収することとした。

４．調査結果と考察

項目	回答	公開保育コーディネーター養成講座公開保育実施園	養成講座以外での公開保育実施園	計
1)保育について会話すること	◎	13	6	19
	○	18	8	26
	△	2	3	5
	×	0	0	0
2)保育について振り返ること	◎	11	5	16
	○	14	7	21
	△	8	5	13
	×	0	0	0
3)園長以外の先生でコーディネーター的役割を意識した進行	◎	7	2	9
	○	16	12	28
	△	10	2	12
	×	0	0	0
4)保育や運営での課題の発見や解決への取組	◎	7	4	11
	○	13	11	24
	△	12	1	13
	×	1	0	1
5)園をオープンにすること	◎	6	3	9
	○	15	8	23
	△	12	5	17
	×	0	0	0

※以下、設問ごとに具体的な回答をまとめているが、当文章については回答者の意図を尊重し、回答文書をそのまま掲載することとしている。

１）設問１「保育について会話すること」について



◎：さらによくなった／○：よくなった／△：かわらない／×：悪くなった

90%の幼稚園・認定こども園において保育に関する会話が増えたという結果となった。ただし、この項目においても、既に以前から実施している園の場合には、今まで通りという△を記載する場合が考えられる。

具体的な回答を以下にまとめる。

１．幼児理解の視点の深化や環境構成への関わり

・子どもや保育について語る際には、行動や活動に着目しながらも、その起因（育ちや環境）について合わせて話しあうようになってきた。
・表面的な出来事だけでなく、子どもの育ちについての語りが増えた。
・よりテーマや内容を深く話すようになった。
・外部に対してオープンにすることで内部の意識もよりオープンになり日々の保育を広い視点で見るようになった
・自由遊びの良さを再確認してそれに対する報告や会話が多くなった。
・先生方が保育の環境設定等に工夫をするようになり、学年での話し合いが増えた。
・課題とそれに対する手だて等、園内で話合い、ステップでオープンにすることで日々の保育、子どもの姿について日常的に今まで以上に話す機会が増えた。課題として打ち出し、共有できていた部分が改善されていく様子や子どもの育ちを気軽に話あえる雰囲気は、今まで以上にオープンになってきた。
・園としての方向性（なぜ・なんのためその方向性になったのか）をより理解する職員が増えたことで、どのように保育をすればいいのか考えたり、質問することが増えた。
・保育の質を高めていくこと、子どもの読取り等向上していきたい課題であった。話し合う

ハードルは低くなり、皆で共有していくこと。園内研修の深まりにもつながり、話し合いが身近になったと感じる。

２．話し合いへの重要性への気付きと積極性

・子どもや保育について積極的に相談や質問等話合う雰囲気ができた。
・公開保育を経験した教員達は「話し合う大切さ」を身を持って経験し、重要性を意識していることが伺える。例えば、長年、年長リーダーをしている教員は、横のクラス担任たちとの話し合いや連携を大切にしている。
・全体的に、子どもや保育について上下関係に関係なく話し合えるようになってきていると感じられる。（職員室内での様子等から）
・主任等年功のある先生が中心に積極的に研修を取り入れている。課題を見つけた時に時間をとるようにしている。
・疑問に思ったことや悩みを相談しやすい雰囲気になった。
・保育について会話は増えました。何気ない立ち話程度、会議の時など公開保育を受け先輩、後輩・クラス担任、副担任分け隔てなくディスカッションする文化がより一層高まったように感じる。
・普段の会話の中で子どもの成長についてよく話すようになった。
・各学年の話し合いの中で各クラスの子どものことや保育について活発な意見交換が行われるようになった。
・とても良いきっかけとなった。今では話し合う雰囲気、意見や思いを言える雰囲気ができている。
・研修会というきちんとした会でなくても普段の何気ない会話から子どものことについて話し合いが増えた。
・お互いに気が付いたことを素直に話し合えるようになった。職員の表情も明るくなった。
・後輩教師が疑問に思ったことを、気軽に聞くことができるようになり、相談が増えた。
・経験年数の少ない保育者が発言しやすくなった。
・若い先生も発言するようになった。
・経験年数の少ない教師も公開保育後意見を言う立場が増え、話しやすい雰囲気になった。
・互いに相談しあうことが当たり前になってきた。課題を共通理解することができたりするようになった。
・保育者間で子どもの内面の思いについて話をすることが増えた。
・お互いの思いを話し合い共有する機会を多く持てた。

３．課題の明確化

・問いを用意して公開保育や国内研修を行うようになった。
・学年の目標と課題を明確に考えようとする姿勢が見られるようになった。
・計画立案の重要性の認識と共通理解が進んだ。
・自園の課題を意識したことで話し合いの内容の絞り込みや話し合いのペースアップが意識されるようになった。
・より実態に合った園内研修や研究になるように公開研究で話し合われたことを意識して

進めるようになった。
・気になる子どもへの対応の仕方等互いに相談することが増えた。

４．話し合いの方法の工夫

・皆で話し合う際には、付箋や模造紙を使い、皆の意見や話の構造が見えるように工夫するようになった。
・時間を用意して、子どもの情報交換をより活発に行うようになった。
・研修方法に小グループで話し合ったり活動したりすることを取り入れることにより、協働意識がより高まったと思う。

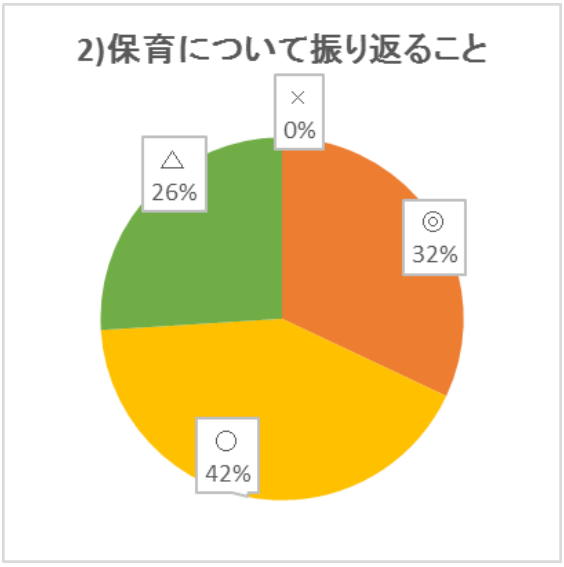
５．チーム学校としての取組

・職員間での共通理解の意識が高まった
・子ども同士の会話や育ちなど自分のクラスだけでなく他のクラスの子どもの様子も一緒に見ながら、変化や成長がみられた時には話ができるようになったことに雰囲気の変化を感じている。
・学年間のみではなく、学年を超えて３年間を通して育ちが繋がっていくように、話し合いがもてるようになってきた。
・全員が発言しようという意識を持ち、同じ学年だけでなく他の学年のことについても全体で考える機会が増えた。
・帰宅時間のことなど出てきて、マイナス的なことも根本を考え直すきっかけになっている
・保護者対応について互いに相談することが多くみられた。
・困ったことを同僚に相談、検討する機会が増えた。
・一人の子どもを職員全体で見るようになった。そのため、具体的な援助の仕方を話し合うようになった。
・環境構成の仕方を相談したり、見せ合うようになったことで、良いものは自分の保育に取り入れるようになった。
・チーム保育を大切にしていたつもりであるがこの機会が出来た事で、以前より深くまた色々な角度で話し合いがもてるようになった。
・公開保育を行ったことで結束がさらに強まり、保育者同士が気軽に話し合える雰囲気ができたように感じる。
・教員の年齢差から以前は教える人教わる人といった縦のつながりが多く説教っぽくなっていたが、それぞれが思いや考えを述べたり聞いたりするようになり、自分の思いを伝えることに抵抗がなくなってきているように感じる。

６．「その他」

・以前から話し合いや保育についての見直し等話をする機会は設けていましたが、公開保育を通して話し合う質が向上した。
・今までもお互いに話し合っていたが、外部の先生方との交流を踏まえ話す視点が変わった。

2）設問２「保育について振り返ること」について



◎：さらによくなった／○：よくなった／△：かわらない／×：悪くなった

74%の幼稚園・認定こども園において保育の振り返りが実施されてる結果を得た。

具体的な回答を以下にまとめる。

１．幼児理解への視点の深まりや視点の明確化

・保育や子どもの育ちをドキュメントシートやポートフォリオシートとして記録したり語ったりする機会が増えた。経験を積むことで少しずつ幼児理解の視点が深まっていると感じる。
・０～2 歳児、3 歳～5 歳児で分かれていた年計画の書式を見通して、全学年をつなげて同じ書式に書くことにした。
・週案では、今まで決まった活動（教師主導）だけを書いていたが、今は子どもの姿を読み取り「～になってほしい」とねらいをもった活動（子ども主体）を計画し書くようになった。担任がクラスの様子・子どもの姿を教育課程に沿って、的確に話せるようになってきている。
・週案の記入について全体的に保育の振り返りとしての記述が多くなった。
・自由遊びに重きを置いた記録の書式になり、子ども理解の質がさらに良くなった感じがする。
・学期末に園全体で共有することで、月のねらいや手だてを具体的に考えることができるようになってきた。
・方法論について大きな変化はないものの、各教師の視点や意識が深まったように感じる
・以前から保育後の話し合い（振り返り）はしているので、変わりはないが意識として内容がよくなったと思う。
・自分の課題を自覚し、隠さず伝え、指摘されたことを直していこうとしている。
・教育課程作成につながった。

・子どもの姿を通して必要なことだけを記録できるようになっている。日案、週案については現在も振り返りを続けている。
・以前に比べて子どもの育ちという点で職員の保育に対する観点や視点に変化が見られた。例えば、保育の振り返りの中で見られていない子どもへの気づきが増えたこと等。
・若い教諭は先輩の指導法や文章指導など多くのことを学ぶことができ保育記録の記入や子ども一人一人の関わり方、指導に大きな変化がみられるようになり嬉しく思う。
・テーマに立ち返って話をするようになった。

２．ＰＤＣＡサイクルの意識

・PDCA サイクルを意識して週案を作成するようになった。
・記録をとり振り返りをまとめるようになった。
・振り返りの機会が増え、意欲的に取り組む姿勢がみられるようになった。
・活動内容の一つ一つを意識することで振り返りをする場が増えた。
・公開保育のアンケート中に保育に対しての改善点をいただいたり、新たな視点をいただいた。それを取り入れながら保育を振り返り、以前からおこなっていた日々の振り返りのみでなく、園全体の保育を見直し、教育の質の向上が得られてきたように感じている。
・保育案の書き方や書式を何度も職員会で協議を重ね、各保育者はとにかく何度も保育案を書き、言葉の表し方等を見直しながら保育の振り返りをする機会が多くなったと感じる。
・今までは保育の立案が上がってきても、主任などが「これはこっちのほうが良い」「これは無理だと思うよ」など立案自体をさせないことがあった。PDCA の plan から試す前に action になっている状況であった。その後 do から check と、自分で企画したことを試したり評価したりできない現状であった。（確かに先輩が言っていることは正しい場合もあるが）今は、プランを立てる段階で相談に乗れる雰囲気づくりと、先輩の先生が気にかけてあげられる雰囲気が作られている。また、少しの失敗で責めるのではなく、自信をもって保育が組み立てられることや、自ら PDCA ができ保育の掘り返りと改善ができるように心がけている。振り返りで気づかない点があれば、先輩保育者がやさしく助言することで振り返りの視点等も気にかけている。
・研修や行事後等は必ず振り返りは実施してきた。その大切さは意識されている。さらに振り返りの方法や内容を充実させたい。
・まだまだ不十分だが、意識して職員会やミーディングをおこない、話し合いの場を持つようにしている。

３．内容の見える化（教員同士・保護者）

・内容の見える化を計り、記録としても残すようになった。
・子どもの遊びの映像や写真をグループ（学年ごと）で見て分析し、振り返りをしている。
・以前よりも保育内容をより検討、さらにその内容を保護者に向けてより発信するようになった。
・質の向上を図る為に、月案、週案の際、保育の組み立て等意識付けを高めたり、保育記録・写真を使用し、振り返りの時間も設けた。保育記録の内容もより書きやすくレイアウトを変えた。記録をとるマンネリ化も防ぐきっかけになった。

・子どもの学びや育ちを保護者に伝えることをクラス便りやホームページで意識するようになった。
・日々の保育や行事について振り返りをおこなっている。各ステップで共通理解をしてきたこと「子どもの主体性を大切に」に沿って振り返ることができるため以前の反省会とは内容が違ってきている。話し合いには見える化を意識するようになった。
・一週間の会議の持ち方を見直し、その中で口頭での話し合いだけではなく、付箋を用いる等その内容を残し次回の話し合いに活かすことができるようになった。
・すぐではないが、公開保育後、他園の見学・研修で環境・遊び・声かけ等日々の保育に疑問を持って考えたり、クラス便りの良い点を再認識したり、プロセスの大切さ、保護者への情報提供をより充実させるための新しい試み等につながっている。

４．効率化

・これまでも振り返りは行っていたが、より効率的に行うようになった。

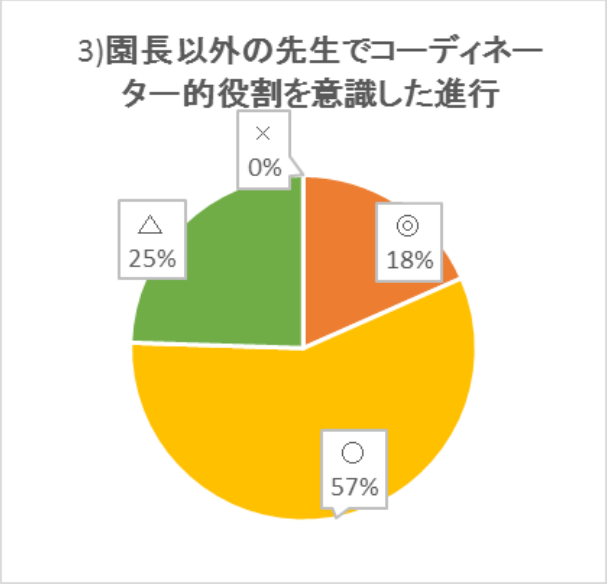
５．書類の見直し

・日案の様式を見直し、子どもの育ちについてより振り返ることができるようにした。
・毎週学年会を開き、週案の見直し等をおこなった。
・今までも保育の振り返りはしていましたが、ポイントを絞って話し合うことができるようになった。日案の記録の書き方や書式を見直す機会になった。
・週案用紙の見直しを行い、保育記録との連動や遊びマップの導入等、保育の振り返りに活かすことができるようになった。

６．今後の課題

・振り返りの重要性の理解は進んだ。しかし現状としてなかなか振り返りのために十分な時間の捻出が出来ていない。
・教育課程を通して毎年の活動や製作にとらわれず今の子どもの様子や興味のあるものは何か等を考えて計画を立てるようになった。さらにより良くするための改善策を考えていきたい。
・保育記録の振り返りができていないことの課題に気づいた。
・学年毎の保育の振り返りの充実を図るようになりたい。

３）設問３「日々の会議等の運営で、園長以外にも、コーディネート的な役割を意識した進行をしているか」について



◎：さらによくなった／○：よくなった／△：かわらない／×：悪くなった

75%の幼稚園・認定こども園において日々の会議等の運営で、園長以外にも、コーディネート的な役割を意識した進行をしているという結果を得た。

具体的な回答を以下にまとめる。

１．具体的な成果

・学年で、保育の願いや子どもの育ちを振り返る際に、ワーク形式にして司会や書記をローテーションで担当するようにした。その結果、それぞれの役割がわかるようになり、協力して園内研修を進めるようになった。
・研究主任や学年主任がコーディネーター的な役割をして主体的に話し合いを進めるようになった。
・より実態に合った園内研修や研究になるように公開研究で話し合われたことを意識して進めるようになった。
・（主に各学年のリーダーたちに限ってのことになるが）公開保育にて、様々な他園の先生方がコーディネーターや分科会の司会、振り返りのサポートがあり、それを間近に見ることで、会議等の運営でのコーディネーター的な役割の詳細を学ぶことができた。自分たちでも努力すれば身につけられるスキルであるという気づきが大きかった。研修を引っ張って行くのは主に園長であったが、今はほぼ副園長が現場の先生たちの保育を回りながら課題を見つけ、それを改善していく研修や振り返りを行うようになった。また各学年のリーダーたちも会議のまとめ方を担う機会も少し出てきた。
・会議で KJ 法を取り入れるようになった。保育で良かったこと、疑問に思ったこと等主任

や他の保育者の意見、アドバイスを求める機会が多くなった。
・主任がコーディネーター（ファシリテーター）となり、付箋を使用した会議を行い各担任の意見や考え等見える化するようになった。公開保育を経験し会議や園内研修の際、意見を規定しないルールが浸透した。それによって、新任や経験年数が浅い職員であっても、自分の考えを述べやすくなった。
・公開保育を経験したことで、話し合いの仕方等も変わってきた。また、コーディネーター的な役割をする先生も増えてきている。園内研でも保育をせめるのではなく、中身を尊重しながら質を問うようになっている。また、相手を尊重し今以上に保育が向上する園内研になってきている。そのためには、経験や年齢だけではなくお互いを理解し尊敬できるように同僚性が育ってきているのではないかと感じている。
・職員が自信を持って自分の意見を言うようになった。
・学年ごとの園内研修をおこなった。
・園内研修では、自分の保育の注目してほしいこと、悩んでいること（問いづくり）を書くようにした。
・行事や保育を掘り返すことで、経験の違う教師からいろいろな意見が出るようになった。
・以前から話し合いや保育についての見直しなど話をする機会は設けていしたが、公開保育を通して話し合う質が向上したように思う。
・園内研修のコーディネーター役の理解が進み今ある課題について園内研修が活発に進むようになった
・自ら改善しようとする気持ちがそれぞれ芽生え、意見を出したり行動するようになってきた。保育にも変化がみられるようになった。
・気になる子をビデオに録り、その子の内面を考え合う機会を作った。今後も続けようと思う。
・主任の意識の変化と長期的な見通しをもった話し合いができるようになった。
・刺激的な意見をいただいたことで個々の保育者が保育に正面からぶつかり、しばらく試行錯誤の日々が続いた。そのことを経て「あそぶ」ということを考え、意識し始め主任を中心に園内研修が充実した。
・高知県が行っている幼保研修（ミドル研修）に参加した職員を中心に園内研修をおこなっている。勉強不足な面もあるが、協働性のある園を目指し、皆で共に成長していこうと職員間で話し合っている。
・各学年より子どもたちの姿を通して本当に必要なこと、必要でないことを見極められるようになってきている。
・普段の職員会ではなるべく全員が発言するように意識して会を進めている。
・ケース会議等の参加が積極的になってきた。
・研修班ごとにリーダーが付箋を用いて園内研修を進めることができるようになった。また継続して課題に取り組む基礎ができた。
・まず学年ごとに行事などの反省点について話し合ってもらい、その中でポイントをいくつか絞った内容のものを全体の反省会で意見として出してもらう。それをすることによって園長からの一方的な伝達ではなく、皆が意見を言いやすい会議となった。
・会議が報告だけではなく、問いもでてきた。

・現場スタッフの自主的な園内研修（ミーティング）がさらに行われるようになった。

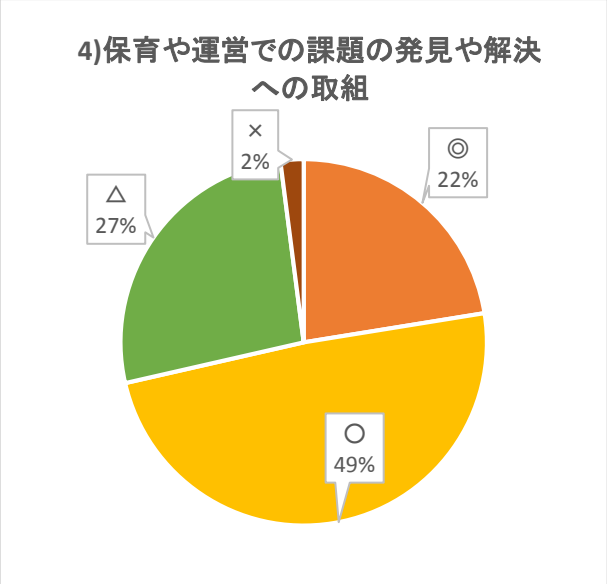
２．今後の課題

・今まで通りが良いのか主任や他教員の積極性等がでてこないので園長・副園長の課題です。
・時間がうまく調整ができなかった。来学期に頑張る。
・園全体で話し合う時間が多くなり、どの教諭も意見が伝えやすくなりました。しかしなかなか時間が設けられないので時間の有効活用を考えないといけない。

３．その他

・現状に大きな問題意識がなかったため、変化なしとする。

４）設問４「保育や運営での課題の発見や解決への取組」について



◎：さらによくなった／○：よくなった／△：かわらない／×：悪くなった

71%の幼稚園・認定　こども園において保育や運営での課題の発見や解決への取組を行っているという結果を得た。
具体的な回答を以下にまとめる。

１．それぞれの園の課題に取り組んでいる例

・公開保育の際に立てた問いについては、各クラスの具体的な内容であったので事後の協議会にて様々な解決をいただいた。その後、行事や保育を見直す際には、活動の運営面だけでなく、育ちに応じて整える環境について等の問いが学年から生まれ検討されるようになった。

・仕事始めの会議で、その年度の重点課題を挙げ、全職員で意識していけるようにしている。重点課題を学校評価にも入れ、３月には振り返りができるようにしている。
・造形展という行事を結果ではなくプロセスの質を大切にして保育をしようという課題が見つかり取り組んだ。
・「子ども理解」については、年齢・時期にあった発達段階を再度確認しながら週案を立てるようになった。
・行事に取り組む時には、出来栄えより何を育てたいかを考えるようになった。
・会議の行い方、時間の使い方を意識するようになった。
・各学年の保育計画の中に定着してきた。わらべうた遊びが園内に広がり集団遊びが各所で見られるようになった。
・夏だけでなく、1年を通して、環境（遊び）図を作り、子どもの育ちを考えた計画が必要だという課題を見つけた。
・その時にあった課題は解決に向かい、そこから新たな課題も見つかった。子どもを主体とする保育を行うために、日々の意識をどう持つべきかが見えた。
・子どもを視る視点や気付きについて深く掘り下げる。課題については継続して解決に向かっている。
・公開保育後、各クラス自由度の高い保育がより強くなった。しかし、自由度が高いと担任の力量で保育の差が出がちになる。子ども達の見取りをどのように深めていくかが今年度の課題になっている。深める為に保育記録の振り返り、写真を通してクラスの様子をディスカッションする時間を設け始めた。
・今後一層進化できると期待している。
・今後やってみたい点や個々の課題が見えてきた。良い刺激になった。
・活動中心の保育からこどもの主体性を伸ばす保育へと変革してきている。大きなテーマだと感じているが、圃や保識者にも伝えながら徐々に変革ができている。日々改善と問いの連続であるがその意識を持てたのも公開保育がきっかけになった。
・経験が少ない自分の保育に自信がない職員に対して意識的にコミュニケーションを取るようにしている。話しやすく相談しやすく互いに学び合える関係作りを 1 から作っていこうと思った。
・園内での出来事や子どもの様子を写真に写し、張り出すなどして、保護者に保育の目的や子どもの育ちを知ってもらうようにしている。保護者もその写真を楽しみにしてくださっている様子である。
・遊んだ後の片付けが最後までできるように全体で取り組んでいる。
・公開保育を通して幼稚園が抱える保育についての課題の発見につながり、職員がいろいろなことに気が付けたので次年度の計画にどのように生かしていくか、取り組めるようになった。
・公開保育を通して幼稚園が抱える保育についての課題の発見につながり、職員がいろいろなことに気が付けたので次年度の計画にどのように生かしていくか、取り組めるようになった。
・自園の課題である異年齢保育に対する取組や「あそび込む」ことへの援助等について保育者一人ひとりが意識して取り組むことができるようになった。課題解決ができたかどう

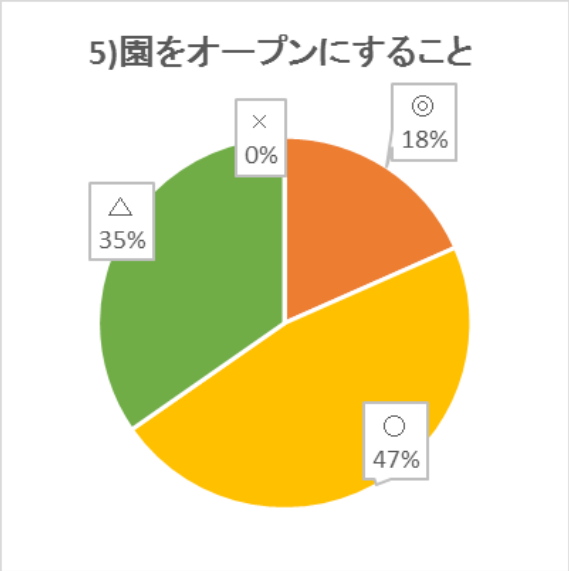
か次回の公開保育で他者と共に考え合う機会を持ちたいと思っている。
・四歳児カリキュラム（ねらい）の見直しをはかった。
・改善することは少しづつ起こってきたが、大きな変化まではまだ行き着いていない。職員の意識は変化したと思う。
・大きな課題についてはまだ途中であり毎日毎月毎年の積み重ねの中で教育課程の見直しというところに向かっていけたらと考えている。
・自園の環境を 100%活かすにがどういう手立てがあるだろうかといつも考えている。「これがいいのでは・・・」と実践しているが、まだ慣例化できるまでには至っていない。
・課題は解決していないが、チームワークを良くして互いに良い保育へ向かう士気は高まっている。
・課題は浮かび上がったが園独自の予算が組めないため、改善は困難である。
・自園の課題はまだ解決してはいないが解決に向けた取組みを始めた。
・課題の解決には至っていないものの、公開保育を通じて各自のもつ悩みや課題の共通認識ができた。
・解決の方向に向いている。また、学年間の気づきを他の学年に相談する習慣がつき、園の課題として捉えられるようになっている。
・行事の見直しという課題があるが、ある程度、親を意識しているところから抜けきれないので出来栄えを意識してしまう。
・できないことを捉えるよりもできることは何かを考え、前向きに仕事をする思いを持つことができるようになった。しかし、また職員が入れ替わっていく中で同じ問題が起きてしまう

２．公開保育を用いた STEP についての回答

・園の特色、園として力を入れていることと、なぜそれに力を入れる必要があるのかを理解して保育のプロセスを構築する一連の“保育者の仕事”についてわかってくれた職員が半分くらいいた。
・まとめた自園の課題がうまく出なかったのかもしれない。コーディネーターの関わり方というより、課題に結びつく参加者の意見が少なかった。
・まとめた自園の課題ではなく、自園の保育の仕方に対する意見が多く初めはがっかりした。しかしそのことを通し職員が良く考え、実践していくことで新しい課題を見つけ取り組んでいった姿はあった
・課題については今後に繋がる指摘やアドバイスよりも肯定的な意見を多くいただけたので自分たちの保育や子どもの姿を今まで以上に肯定的に捉えるようになった。また今の子どもたちの姿から育ちのつながりと発達の目安を皆で共有して、保育を組み立てていくことができるように教育課程の見直し、具体化を図っていきたい。
・取り入れられる所から、少しずつ取り組んでいるが、結果に至っていない所もあり、教師間でも問いを持ちながら進めている。
・課題の解決には至っていないものの、公開保育を通じて各自のもつ悩みや課題の共通認識ができた
・公開保育のステップを通してまとめた自園の課題は解決までは至っていないのが現状で

ある。しかし課題を課題として意識しているので、その点は進歩と考えられる。解決まで至っていない理由は、公開保育の翌年より認定こども園に移行し O 歳から年長までの一貫した保育の検討が必要となったことと、日々対応すべき課題が多くあり、なかなか保育の質に関する課題まで手が回らないのが現状。

5）設問５「園をオープンにすること」について



◎：さらによくなった／○：よくなった／△：かわらない／×：悪くなった

65%の幼稚園・認定こども園において園を開く取組を行っているという結果を得た。
具体的な回答を以下にまとめる。

1. 園を保護者や地域に開くという取組について

・ポートフォリオシートやドキュメントシートに取り組むことは、私たちの子どもをみる目が育つとともに、保護者に私たちが大切にしている教育や子どもの育ちを伝える機会になっている。
・園からの情報も保護者になるべく多く伝えることを考えるようになった。
・地域の方々へのオープンはまだなかなかできていないが、手紙の配布を多くし、幼稚園の考え方等を伝えるようにしたことで保護者の理解を得ている。
・幼稚園として考えると、保護者への発信が園からの一方的なものになってしまっていることが多いように考えている。
・まだ不十分ではあるが、Facebook やおたよりなど、写真やイラストを使い、視覚的にも充実してきたように思う。遊びの様子だけでなく、こうなってほしい・こういうところを見てほしい・どういう対応をしているか等詳しく伝えるよう意識している。新聞や地域情報誌などで情報の提供を考えるようになった。
・参観日の時など、4 月当初から今までのクラスの様子の写真を貼り子ども達の姿を掲示し

ている。また、ブログなどでも随時幼稚園の様子などオープンにしている。今年度ホームページがリニューアルされることを機に学生向けに情報を発信し始めた。担任の想いなど外へ紹介するにあたり気づきも多く見つけることもできた。
・様々な園行事に在園児だけでなく未就園児や地域の方々の参加が増加した。
・今までもオープンにしていたが、伝え方を工夫する。
・保護者に掲示板を通して保育のねらいや担任の思いを知らせることで、行事では結果だけでなく、過程の大切さを知ってもらうことができた。
・園内における生活や活動を理解して戴くために今まで以上に HP の充実を計り地域との交流を前向きに進めてきている。
・保育の悩みを園で相談できたり、学年間でのつながりだったりはできるようになってきている。未就園児の保護者や、地域に教育機関としての役割として園を開放することはできていたが、公開保育を実施したことで、内容面にも変化が起きている。
・もとよりその風土はあり、その良さを確認しました。
・保護者に子どもの様子、（以前から行っていたがより一層）育ちを話すようになった。
・保護者が園に来られた際には、子どもたちが実際にやっていることを報告したり研修のまとめを保護者の目の触れるところに掲示するようにした。
・自分の担当する学年以外の活動を職員間で話し合う機会が増え、話しやすくなり、全体で子どもたちの理解や問題を共有できるようになり、また、そうした子どもたちの育ちを保護者に伝えようという意識が高まった。
・意識の高まりにつながった。第三者評価導入に向けこれは今後の重要課題の一つと考える。
・職員間の横と縦のつながりが深められ、常に職員間で保育の話題が出てくるようになった。
・保護者や地域への発信もホームページ、メール等で、また市の広報等への掲載に働きかけをしながら発信するように心がけている。
・学年を越えての話し合いが以前に比べ活発になったことで互いの保育が見えやすくなりました。おかげで園としてこういう考えで行っているという意識も高まり、HP や園だより、役員会等で子どもの様子、育ちの姿、保育の中での願いを伝えようという思いが強くなった。
・保育の見える化を積極的に行う姿勢を園全体で意識することができるようになった。玄関ホールにボードをかかげ週の内容を記録する等、その方法も工夫して行い、保護者からも評価を得ている。
・情報をただオープンにするのではなく、より園の活動、子どものいきいきとした姿が共有され、信頼につながるよう公開の仕方、在り方を現状に照らし合わせながらおこない、企みたいと思っている。
・保護者へ知らせることについて、職員が重要性を感じ、忙しい日々の中でもエピソード記録の発行等に前向きに取り組んでいる。

2. 今回の「公開保育」を通して開くという取組について

・見てもらうことで、評価をもらい、課題も見えた事が喜びとなった。今までよりも研修会

に前向きに参加したいという声が挙がるようになった。
・事前研修や事後研修にてコーディネーターの方より自園をオープンにする意義を説明していただいたため、自分たちの保育を発信し園をオープンにしていくことへの理解が進みその姿勢を大切にするようになったと思う。
・オープンにすることの良さがわかったので恐れることはないという意識になっている。
・公開保育に対してマイナスの印象ではなく、やって良かったとの声が多く職員から聞かれた。
・一度公開保育を行ったことにより今後も自園をオープンにして様々な園の方から助言をもらいたという意識が高まった。
・公開保育を通して園が少しずつ変化していったのは事実であるが、今回のような公開保育の在り方（園の先生が批判をされるような在り方）であるならばこの公開保育で園をオープンにすることはない。

3. 園内の教員間で開いていくという取組について

・今の学年の発達に応じた保育、上下の学年との保育内容を幼稚園全体で話したり、問題、悩みなどがあればすぐ他学年にも相談しよりよくなるために変えたり、情報交換したりするようになった。
・学年間を超えた話や相談ができるようになった。
・担任が保育の悩みや保護者との対応について園長や主任、他の保育者に相談しやすくなった。
・学年間の話し合いに補助教諭も参加してもらい、担任と補助教諭がさらに連携していけるようにしている。
・教員が問題を一人で抱えるのではなく、園全体で意見交換ができるようになった。
・学年間や園内で当然共通理解できていると思っていたことが、理解されていないことに振り返りワーク（ステップ 5）で気づかされた。伝えあうこと、わかりあうこと、繋がり高めあうことが自園の良さと自負していたが、今後の課題であることに気付くことができてよかった。

4. 以前から行っていることで変化はない例

・前から情報交換は園内や保護者ともおこなわれている。
・日頃、大学の観察が入ったり、インターンシップ生を多く受け入れたり、保護者の保育参加があったり、視察園を受け入れることも多い園のため、園や保育をオープンにすることには抵抗感がもともとない。
・もともとオープンなので。
・以前から公開性は大切にしているが、今もより良くするための改善は必要だと思う。Step によって、と言われると少し考えてしまう。
・常に対外的にオープンにしてきた今後もこの姿勢は続けていく。
・あまり変わらない。
・現状に大きな問題意識がなかったため、変化なしとさせていただきました。

６）設問６「現時点から振り返って『公開保育と各 STEP』は、各園においてどのような影響があったか」について

この設問は自由記述とした。具体的な回答を以下にまとめる。

１．この取組の成果について

・単なる打合せの会議ではなく、保育の振り返りやねらい、環境の構成等、子ども理解を深めようとする有意義な会議が行われるようになってきている。
・学年ごとに自分たちで園内研修を進めるようになってきている。その結果、保育を語ることを楽しめるようになってきている。
・「やりたい」と思っていた事を具体化し、実感できた事が職員にとって自信につながったと思う。特に問づくりの際に、職員と話し合う（保育について）時間をとったことはとても有効だった。
・できて３年目の園であり、この公開保育があったことで月・週・日案の書き方や、どのような園にしたいのか、目指しているのかということを園全体で考え、進めていくことができた。園内研をかさねることで自分の保育を振り返り改善点を知ることができた。
・１つの目標に対して園を上げて取り組めたことは、職員間のチームワークの結束にも役立ち、保育の見方、公開保育の見方、捉え方が深まったと思う。
・付箋を使って話し合いをすすめたり、主任がホワイトボードに板書したりして、保育者全員が共通理解しながら協議できるようになった。STEP２と STEP５は自園の教育の良さや課題を見つけるとても良い機会になった。STEP３は参加者の先生方が温かい目でかつ真剣に本園の課題について考えてくださり、保育者も園をオープンにすることの良さを実感した。
・課題を職員で共有しやすくなり、意識して保育にあたられるようになった。
・公開保育の構えや参加する時の考えをきちんと持って観察するようになった。付箋を使って考えをまとめていく手法を多く取り入れて行うようになってきた。
・教師間で保育について踏み込んだ話ができるようになってきた。自分や他の教師のプラスな面とマイナスな面を知っていけることは、保育の質の質を高めていくよいきっかけとなっていると思う。
・事前研修で自園の良さと課題を明確にする方法を教えて頂き、あらたな課題と向き合う時に具体的に整理する方法を知ることができたので、会議等で使うことができる。
・要点をまとめて発表することや、付箋に自分の思いを端的に記述することも勉強になった。
・自分の保育の課題をどのように他の人々にわかりやすく伝えたらよいのか、文章で表現すればよいのか。この部分は保育者が苦手とするところだと思いますので、サポートをいただきながら経験できたことは保育者にとってありがたいことです。
・公開保育は初めての経験でしたので、皆緊張するかと思ったのですが、前日も当日も普通りでした。当日は様々な付箋を多く貼っていただき、様々な意見をいただきました。教員達にとって自分の保育に対して様々な意見をいただく機会は初めてだったので、とてもありがたく、勉強になったと皆前向きに受け止めていました。

・様々な意見をいただく中で「このような視点があるのだ」「園によって随分考えが違うんだ。興味深い」と多面的な視点に気づかせていただいたことが大きいようでした。
・良いね！のご意見に対しては、「良いと言ってくださったことが力になった」「励ましていただき自信になった」と率直に嬉しかったようです。
・課題、疑問のご意見に対しては、様々なご意見がありました。園の教育方針の違いからくる疑問もありましたが、当園の保育方針は・・と振り返りで意思の統一を行うことによって更に当園が大切にする保育について深めることができました。
・教員たちの意識の中で、自分たちの保育を公開することや地域、保護者に自園の保育を伝えることの重要性を知ることができたことが大きいと感じます。
・日頃そこまで意識していなかった部分を自園の魅力として挙げていただき、改めて良さを確認することができた。たくさんのご意見をいただき、もっと研修を増やし、保育の質を高めたいという思いが強くなった。新たな課題をみつけ、話し合い、振り返りを心掛けている。
・公開保育をきっかけに、コーナー保育の質が高まったように感じる。特に廃材遊びは年々、質が高まっている。子ども達の自由な発想が、製作意欲の相乗効果を生んでいる。また、“自分の考えを持つ”という共通認識は、経験年数が豊富な職員だけでなく、新任にとっても、わかりやすいキーワードにここ数年なってきているように感じている。なお、ディスカッションする時の“意見は否定しない”というルールも安心して発言できているようだ。
・今の良さや改善の方向性はこのまま進めたらよいという再確認になった。
・どのような課題でもあいまいなままにせず解決の方向に向くよう具体的・分析的に見ることができるようになった。
・公開保育の良さを他園にも広め、勧めていきたいと思うようになった。
・幼保小連携の公開保育をおこない、職員も自分の保育に自信を持って行動したり、話し合いに参加できるようになった。
・小学校の先生からも素晴らしい取組だという言葉をいただいた。
・STEP を取り組んでいくことで、子ども一人ひとりを丁寧に見るようになり、子ども理解が少しずつ深まった。子ども理解を心掛けるようになると、子どもに合った「あそび」「環境」を用意するようになった。
・今までこのような形で保育・教育に取り組んだり、進めたりしなかったこともあり保育・教育の根本から見直す必要性を感じた。課題が見えてはきたもののまず行事等の精選をしていかないと次に進むことができないように思う。田の字等を使っての園行事や保育の見直しは経験を問わずすべての先生が発言することが出来、学年としても園としても教育の方向性が見えてきていることにその成果がうかがえる。
・自園の保育について個々の職員で良いと思う部分や課題だと思っている部分がわかり、今後の方向性が統一される機会にもなった。
・自分たちが抱えていた問題（保護者への遊びの大切さや個々の成長をどう伝えていくか）を更に明確化することができた。また、先生方の思いをしっかり伝え合う良い機会となり、他園の先生方から自分たちの保育がどう映ったのかを知ることもできた。先生方のやる気と自信につなげることができたように感じた。

・教員、職員は日々自分の保育が正しいか悩んでいる。この考えで良いのか、本当にこの伝え方で合っているのかなど悩みは尽きない。今回の公開保育の各 STEP を経験することで、園長の思いを上の先生だけではなく伝えることができたことや、先生たちの同僚性が育まれたと感じる。また、他園のベテラン先生にグループワークなどでご助言いただいたことで自信にもつながった。公開保育をきっかけに、日々の子どもたちの変化を見取り保育に活かせるようになってきている。
・子どもの成長を第一に考え日々の保育活動を充実しようとする流れができたと感じている
・現時点でどのような影響があったかはわからないが、子どもの育ちについて、教職員が改めて考えるよい機会であったとは思う。
・今まで行っていた職員会議の場で教員の困っていることや悩んでいることを話し合っていましたが、改めて他者にはいってもらい、客観的に見ることができて教員一人ひとりが今までの保育を見直す良い機会になりました。ただ、公開保育前後は刺激があり、変化が必要であると感じていましたが、日々の保育の中で急に変化をもたらすことは難しいように感じます。できることから始めていけたらと思います。子どもの健やかなる成長の担い手として質の向上のために研鑽を積んでいけたらと思います
・日々のミーティング、園内研修等、保育の質の向上のために職員で研修を進める体制はある程度できていると思っていたが、幼児理解、三年間の育ちのつながりの共通理解、同僚性など今後の課題が浮き彫りになった。園外の先生（参加者）へ自分の保育や子どもの姿を語る担任一人ひとりに意識の高まりや育ちを感じることができた。公開保育を通して、自園のよさと新たな課題を全員で確認することができよかったと思う。
・教師間の意見の共有ができ同じ方向を向くことができた。
・他園の先生たちの意見を聞くことがで、自分たちだけでは思いつかない意見や今後も取り組んでいくべきこと等考えることができよかった。
・自分たちが良いと思っていたことが違った影響を子どもたちに与えていたと気付けよかった。
・こどもの遊びの姿を見て、主体的に遊んでいる等の意見をもらい自信になった。
・保育者・幼稚園教諭の在り方を意識して仕事に取り組むようになった職員がいます。全員とはいかないのが残念ですが今後も研修会を企画、運営する方々の熱意と指導する先生の手腕に頼りながら頑張りたい。
・個々に感じていたことを言葉にし、形にしていくことができた体験から、自ら発信してもいいのだという自信を持つことができたように思う。
・とても良い経験をさせてもらいました。先生たちの保育に対する意気込みが変化しつつあることと、保育について奥深く考えられるようになってきた。
・子どもとの活動の中で、答えをすぐに出すのではなく子どもたちから引き出そうとする工夫がみられるようになってきた。
・子どもたちの次の活動が言葉や態度から読み取れるようになり、保育がより楽しくなってきた。
・人に見てもらうことによって、日常の中で自分が絶対に気が付かないところへの指摘もあり、良いも悪いも気づきが多く、自園の良いところや問題点が明確になった。

・みてもらう中でこんなにたくさんの気づきがあったのかということにも気が付けた。そして、コーディネーターの先生に指導いただく等、新しいやりかたで苦労もあったが、そのやりかたにチャレンジする中でとても勉強になった。
・公開保育をするにあたって事前の STEP の取組みにおいてまず自園のこと、保育者自身の保育の振り返りや子ども理解等を意識する機会が与えられ、保育者の質が高められたことを実感した。一人ひとりが考えを発信する機会も多くもつようになり、保護者との対応においても、丁寧に「伝える」「発信していく」という心遣いをより気を付けてするようになったと思う。良い機会に感謝する。
・皆が同じ方向を向いているとずっと思いこんでいたが、ステップ後の園内研修で実はそうではなく、意識にズレがあったり、使う言葉の意味や受け取りも様々であったりということに気が付き驚いた。これまで上層でしか話し合えていなかったと反省した。この機会に皆で共通理解をはかるために、話し合えたことが壁をなくし更に公開保育では教員に自信を与えるきっかけとなったように思う。
・自分たちの目指したい保育に関して「大まかな目標」と「具体的な課題」が浮かび上がった。一連の研修で終わりではなく、今後の方向性が見えてきた。
・自分の保育で「できていたんだ！」という自信と自分たちではわからなかった課題が明らかになり「やって良かった！」という雰囲気になっている。
・保育者一人ひとりが「保育を考える」という当たり前の営みに対し、課題を持ちながら記録を通して考えることができるようになった。
・自園の自己満足ではなく、他者の視点を通し保育を客観的にとらえ、その意味を見つめ直すことができた。
・他者の視点を通すことにより、より強く自園の存在意義を考え、自園の良さを確認することができた。
・初めての公開保育は不安が大きかったが、その現状も含め見て頂けたことは今につながっている。一人一人の保育者を認め合い、園の良いところを再認識しそれをベースに保育を読み取っていくことは身近な学びである。
・自園を公開するという一歩を踏み出すことによって、風通しを感じ、自園の良い点に気付き、また他からのアドバイスを沢山いただき、素直に改善していくことの積み重ねで、保育現場の質を高めていきたいという気持ちが持てた。
・課題を持って参加者に問う方法はとてもよかったと思う。課題を見つけるところから普段の保育の振り返りになり、それを様々な形で評価してもらうことで職員のモチベーションが高くなったし、課題を解決したり、問題点を受け入れるようになった。
・園の問題が具体的に認識できた。
・園の内面的なものを改めて見ることができた。
・問いをつくりながら意識していく中で解決していくこともあった。
・今後にも使える考え方などが学べた。
・一人で抱え込まない。
・自ら遊びの提案をし、コーナーを作り、異年齢保育が行われるようになった。
・話し合いの中で「もっとこうしたら」という意見が出るようになった。
・1 分間スピーチを続けることで伝えたいことをしっかり整理できるようになった。

・悩み、課題の共通認識ができた。
・課題がより具現化された。
・自園単独で行う園内研修の方法論が学べるきっかけとなった。
・入園希望者が若干増加した。

2. この取組に対する課題について

・公開保育を通して園の保育を見直す良いきっかけとなった。しかし公開保育時の午後の話し合いの時間等に多数いた指名されたコーディネーターの方が、コーディネートではなく批判的な言動をしたり決めつけるような言葉が目立っていた。「コーディネーター」は何であるのかをもう一度考え直してほしい。そしてコーディネーターの派遣は責任をもって行ってほしい。
・講師の先生を立てずに行ったので不十分なところがあったと思います
・公開保育を実施するときは全クラスで行うことがベストだと思う。全クラス公開は全員が意識して子どもにとって望ましい保育を考え合う良い機会になるが全クラスとなるとコーディネーターの人数が不足となり保育の振り返りが手薄になるような気がしている。課題が明確になっても慣れなどがありなかなか改善しにくいこともある。
・一番時間を要したのは問いづくりであった。公開保育前の夏休みを利用し、何回も話し合い考え直した。それらの時間のことを考えると公開保育が 2 学期以降になると思う。参加者のアンケートの中に行事の多い 2 学期より 1 学期に公開保育を参観させてほしいとあったが、無理かなと感じた。
・問いづくりが難しく、あらためて園内研修を実施して問いを作った。

３．　公開保育を活用した自己評価支援システムとリフレクティブ・マネジメントとの関係性

公開保育を活用した自己評価支援システムを運用することにより、各幼稚園において教育の質向上につながる様々な効果が得られることが、追跡調査によって明らかになった。ここでは、その効果とリフレクティブ・マネジメントとの関係性について述べたい。

各園において、リフレクティブ・マネジメントが行われるためには、まず教員一人一人に「教育・保育を振り返ること」の意義が明確に意識されることが重要である。追跡調査の結果からも、公開保育の取組を行ったことで、その後、実践についての振り返りをする機会が増えていることがわかるが、振り返りの回数だけでなく、振り返りの視点や内容にも変化が見られ、幼児を理解するための視点が深まったり、PDCA サイクルや教育課程を意識した振り返りが行われたりするようになってきている。そして、振り返りを継続的に行うことになり、指導案や環境の構成、幼児への指導や記録についても変化が見られるようになり、その結果、教育・保育の質が向上しているという実感を教員等が持つようになってきている。教員等の学びが主体的な取組によって促されることを考えると、一人一人の教員等が振り返ることの意義を意識することこそ、リフレクティブ・マネジメントの原動力となるものである。公開保育を活用した自己評価支援システムが、外部の視点を得ながら、自分や自園の教育・保育を主体的に振り返る機会を提供していることは、リフレクティブ・マネジメントにつながるものであると言えるであろう。

リフレクションが、教員等の個人内対話のみならず、同僚等との対話による議論を通じて繰り返し行われることが重要であると考えると、教員同士が自由に意見交換し合えるような関係の構築、つまり同僚性の高まりが必要である。その最も基本的な「保育について会話すること」が一連の公開保育の取組をしたことにより、９割の園において増えたということは、リフレクティブ・マネジメントへの効果として大変大きいということが言える。外部に対して自園をオープンにすることで、内部の意識をよりオープンにする効果があることや、活発に意見交換をすることが教育の質を高めることにつながるという、教員同士の対話の重要性への気付きとなり、各教員がより積極的に話合いに参加するようになってきていることがうかがわれる。そして、話合いの方法にも工夫がみられ、公開保育の取組の時に体験したような付箋や模造紙を使って誰もが意見を出しやすいような方法を取ったり、その場に応じて小グループで話合いを持ち、その後全体で共通理解し合うようなことも行ったりしている。また、自分たちの話合いの内容を視覚化して残し、次の話合いに活かすといった取組を始めている園もある。

リフレクティブ・マネジメントを高めていくためには、チーム学校としての取組が重要であり、教員間でその意識が高まったことは、大変意義があることと考えられる。

チームとして教育の質を高める取組を推進していくには、いわゆるミドル・リーダーと言われるような存在の育成が欠かせない。特に、リフレクティブ・マネジメントを支えていくためには、各園におけるミドル・リーダーがリフレクティブ・マネージャーとしての役割を適切に果たすことが期待されるわけであるが、公開保育の取組を経験したことで、主任や学年主任等が振り返りの際コーディネーター的な役割をする園が増えてきている。このことに関しては、公開保育を活用した自己評価支援システムにおける公開保育コー

ディネーターの姿がモデルとなり、公開保育園の教員等の意識を高めているという効果も考えられ、そのような意味からも、公開保育コーディネーターのスキルアップは今後の重要な課題である。

教員等によるリフレクションが自己評価を通して生かされ、組織としての成長につなげて教育・保育の質を高めていくためには、自らの課題を発見し、外部の視点も取り入れながら、同僚との対話を重ねてその解決策を導き出し、改善に向けて取り組んでいくことが重要である。追跡調査によれば、約７割の公開保育園で、教育・保育実践や運営での課題発見や解決への取組を行っていることがわかった。公開保育を経験してすぐには、課題解決が難しくとも、園内の同僚性が高まり、振り返ることの重要性を教員等が意識し、振り返りの場をコーディネートするリフレクティブ・マネージャーが育つことで、少しずつではあるが自己評価の質が高まり、チーム学校として課題を解決しながら教育の質を向上させていくことができると考えられる。

さらに、幼稚園等の教育に関わる家庭や地域に対して園をオープンにするという取組も増えてきていることから、それらの人々と園の教育のよさや課題、幼児の育ちについて共通理解を得ていくことで、協働してより質の高い実践を創り上げていくことも可能になっていくと考えられる。

これまで、幼稚園等において振り返りは行われてきてはいるが、自律的に学習・成長する組織体としてリフレクティブ・マネジメントを高めていくといった意識はまだ薄いものと思われる。追跡調査によって、公開保育を活用した自己評価支援システムのリフレクティブ・マネジメントへの効果が浮かび上がってきており、今後は公開保育を活用した自己評価支援システムの周知と共にその効果についても情報として伝えていきたい。また、リフレクションの重要性の理解は教員等の中で進んではいるものの、現状としてなかなかそのための十分な時間が捻出できていないことも課題の一つである。さらに、リフレクティブ・マネージャーの育成やその一つのモデルとなる公開保育コーディネーターの質の向上については、今後の課題として引き続き検討していきたい。

４．評価者育成

①幼児教育の質の評価の概要

今、幼児教育の重要性が認識され、世界の先進諸国では、子供が遊びを通して主体的な学びを深めることが問題解決型学力の育ちの根幹に関わっていることが明らかになり、乳幼児期からの遊びを中心とした教育が重要視されている。「教育・保育の質」についても注目されるようになり、OECD ではペリー就学前調査等の長期追跡調査の結果から乳幼児期の教育・保育の質がその後の子供の成長に大きな影響を与えるとしている。

日本においても、従来から大切にしてきた環境を通した主体的な学びがアクティブ・ラーニング、汎用的学力や自分の意思と相手の意見を調整するなど非認知的能力の根幹を形成するものとして、その重要性が認識され、正に幼児教育を起点とする学力を向上させることが我が国の課題となりつつある。

そのような社会情勢の中で、子ども・子育て支援新制度がスタートしたが、子供の育ちや教育・保育の質についての議論は充分とは言えず、真の意味での幼児期の教育・保育の質の向上はますます重要になってきている。

教育・保育の質については様々な定義があり、何を持ってよいとするかは難しいところであるが、次のように実践場面（保育者と子供のやりとり等の保育のプロセス）の質や保育を支える構造的な部分の質、そして幼稚園教育要領等の改訂にともない議論された幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿などの結果として子供たちにどのような能力が育ったかという３つの質に整理することができる。

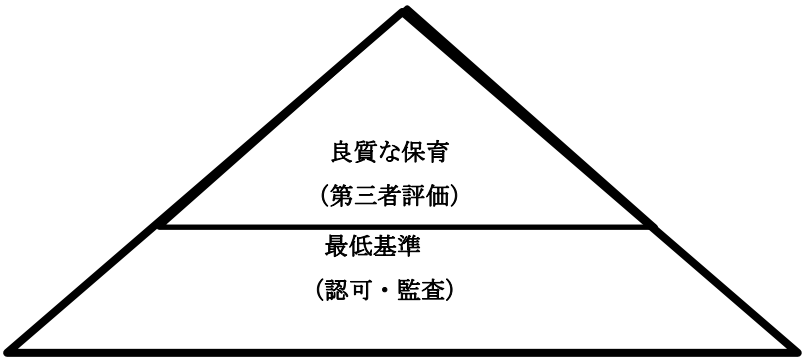
・構造の質（学級の子供の人数、保育者と子供の比率、保育室の面積、保育者の経験年数・学歴・研修、等）。
・プロセスの質（保育場面における子供理解に基づいた環境構成や関わり等）。
・成果の質（結果として何が子供に育ったか。５領域の視点での発達、幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿等）

また、現在教育・保育の質を評価する様々な尺度が開発され、環境の評価やプロセスの評価等様々な取組みがなされているが、教育・保育という営み全体を正確に評価できるものは開発されていない。それぞれの尺度の良さに学び、活用しながらも日本という国やその文化の中で倉橋以来培ってきたきめ細やかな教育・保育の質を定義し、向上させていくことが求められている。

②質を評価する視点と評価項目

幼稚園や幼保連携型認定こども園の質の評価を行うに当たっては、下図に示すように行政からの認可や監査という最低基準を満たした上で、教育・保育活動が「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「幼稚園教育要領」等に示された理念や内容に基づき、「子供が保育者との信頼関係に支えられ、自ら安心して環境にかかわり、その活動が豊かに展開されているのか」、「幼児期にふさわしい生活が展開され、遊びを通しての総合的な指導が行われているか。」、「一人一人の特性に応じた指導が行われているか。」等を重要な視点と

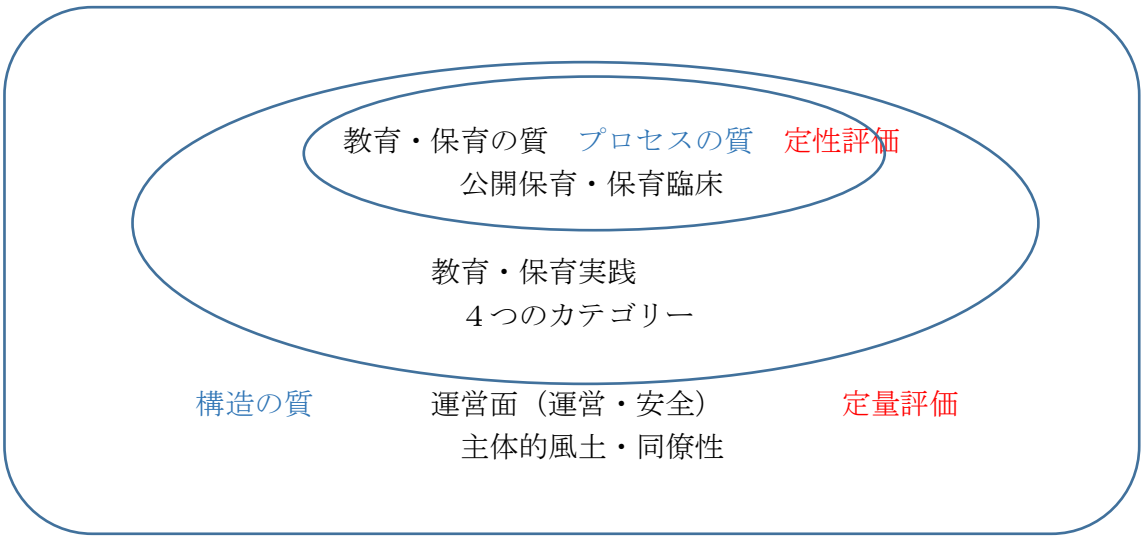
して質の評価（良質な教育・保育）を行うとともに、評価をきっかけとして各園の自己評価活動を支援することを通してそれぞれの園の教育・保育の質の向上を目的とするものである。



また、子供の成長にとって最も重要な保育のプロセスの質の評価を最も重要な評価の観点としている。実践を公開した園の保育者と外部からの参加者が、公開した園の良さや取り組むべき課題について話し合う過程で定性的にプロセスの質を明らかにしていくことを評価の中心に据えている。そして、保育のプロセスの質を支える教育・保育の質を実践と運営面に分け、更に実践については以下の４つのカテゴリー（視点）に分けて構造的な質についても評価を行う。

Ａ教育・保育
(1)愛されて育つ子供・・・子供の人権、安全と健康
(2) 子供と共に育つ保育者・・・・保育者の資質向上・研修
(3)保育実践・・・子供理解・保育の計画・保育環境・保育の実践・記録振り返り
(4)家庭・地域連携

Ｂ運営



また、人生の始まりである乳幼児期に全ての子供が愛されて育ち、自分が自分であってよいという感覚と、人は信頼するに値する存在であり、他者と共に居ることが心地良いという感覚が育つように子供の思いに寄り添い、子供一人一人の良さを伸びるように支えていくことを大切にした保育が実践されるよう保育の質を評価するとともに、園が主体的に自園の課題の解決に取り組むなど、自己評価を中心とするその園の学校評価全体が充実することにより、真に教育の質の向上するよう、会議や研修の場で全ての教職員の意見が尊重され、主体的に参加するような園の風土があるか、そのような風土を醸成するリーダーシップが存在するかについても評価する必要がある。

③評価者の資質・能力と養成カリキュラム

○評価者に求められる資質・能力

幼児教育・保育の質を評価する評価者に求められる資質・能力としては教育・保育の構造に即して以下の能力・経験が求められる。

・プロセスの質を評価するために

幼児教育・保育の知見（環境を通して行う教育を基本とする、幼児の自発的な活動としての遊びを中心とした教育、個々に応じた総合的な指導等についての理解

・教育・保育の実践を評価するために

(1) 子供の人権、安全と健康についての理解

(2)保育者の資質向上・研修についての理解

(3) 子供理解・保育の計画（カリキュラムマネジメント）・保育環境・保育の実践・記録振り返りについての理解

(4)家庭・地域連携・支援についての理解

・評価項目についての理解・評価の実施

○養成カリキュラム

全ての資質能力を研修等に於いて学ぶのではなく、それまでの幼児教育に携わって経験や保育者養成校等での経験を基に評価に関する研修等を行う

評価者養成カリキュラム（基礎資格）

⑴プロセスの質を評価するために（幼児教育・保育の知見に関する項目）

Ｃ－２　保育を支える発達の理論

Ｅ－１　幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領と教育・保育課程

Ｅ－２　実践の基礎

⑵教育・保育の実践を評価するために

ア　子供の人権、安全と健康についての理解

Ａ－１　子供の人権

Ａ－２　健康な生活

Ａ－３　安全な園生活

Ａ－４　愛情深い保育

イ　保育者の資質向上・研修についての理解

Ｂ－１　人間性を磨く

Ｂ－５　自園の保育の理解と実践

Ｂ－６　職場における同僚性

ウ 子供理解・保育の計画（カリキュラムマネジメント）・保育環境・保育の実践・記録、振り返りについての理解

Ｄ－１　育ちの理解

Ｄ－２　育ちの記録

Ｅ－３　指導計画から保育の立案

Ｅ－４　環境の構成

Ｅ－５　保育の実践

Ｅ－７　保育の振り返りと評価

エ　家庭・地域連携・支援についての理解

Ｆ－１　保護者・地域との連携

Ｆ－２　子育ての支援

※上記の記号は（公財）　全日本私立幼稚園幼児教育研究機構研修俯瞰図による。

④幼児教育の質の評価の課題

これまで保育所等で実施されてきた第三者評価は外部の専門家によるマニュアルに沿った評価で、外部監査的であり、実際の保育内容やプロセスについての評価は殆ど無く教育の質向上に寄与しているとは言い難いものであった。本来教育・保育の質は子供にとってどうあるべきかが最も重要であるにもかかわらず、医療や老人介護等も包含した福祉サービスの制度から生まれた評価であるため、利用者である保護者の使いやすさが優先されがちであることも危惧される。また、教育・保育の質の評価を行う際には構造的な質や成果の質は定量的に評価しやすいので、そのような評価に偏る評価が散見されるが、真に教育の質向上を目指すには教育・保育のプロセス評価が重要である。しかし、そのプロセスの評価を実践場面からできる評価者を養成することは大変難しい。現在、教育・保育の全般を評価できる指標はなく、様々な評価の指標を理解し、活用しつつ、質の高い教育・保育を評価する客観的指標に関しての研究が求められる。

Ⅳ. まとめ

公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
研究研修委員長　宮下　友美恵

幼児期の教育は生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園等において、環境を通した質の高い幼児教育が行われることは、きわめて重要である。

学校評価を推進することにより、園運営の改善や教育の質の向上を図ることは、幼稚園等の活性化や信頼される園づくりにつながるものと期待されている。そうした観点から、本財団においても研究事業等を通じて幼稚園等における学校評価を推進してきたところである。

その一環として、本財団は平成 25 年度から平成 27 年度の文部科学省委託事業「幼児教育の改善・充実調査研究」において、公開保育を実施し、外部の視点を導入することによって、自園の良さや課題を見つけ幼児教育の質を向上させていく「公開保育を活用した自己評価支援システム」の開発と公開保育園に寄り添いながら支援を行う公開保育コーディネーターの養成に関する調査研究を行ってきた。

また、平成 27 年度の上記委託事業において、第三者評価の一手法として「幼稚園・幼保連携型認定こども園における評価実施試行例」を作成し、試行例を基に認定こども園の第三者評価を実施することで、外部監査的な評価ではない第三者評価の調査研究を行ってきた。

今年度は、「公開保育を活用した自己評価支援システム」をより質の高い実効性のあるものとして構築するために、「公開保育コーディネーターハンドブック」を改訂したり、このシステムにおいて重要な役割を担う公開保育コーディネーターの質の向上を図ったりしてきた。

また平成 25 年度から現在までに、この自己評価支援システムを実施した幼稚園等に対し、アンケートによる追跡調査を実施し、公開保育後の効果、特に教員等のリフレクションやリフレクティブ・マネジメント、リフレクティブ・マネージャーの育成との関係性について検討を行った。その結果、自己評価支援システムを実施することにより、教員等間において教育・保育についての振り返り(リフレクション)をする機会が増えたり、各園におけるミドル・リーダーが振り返りの場でコーディネーター的な役割をするようになってきていることが分かった。また、教員等が自らの課題を発見し、外部の視点も取り入れながら、同僚との対話を重ねてその解決策を導き出し、改善に向けての取組をするようになるなど、公開保育を活用した自己評価支援システムがリフレクティブ・マネジメントやリフレクティブ・マネージャーの育成に有効であることが明らかになった。これからは、各園の教員等がリフレクティブ・マネジメントの重要性を意識し、自己評価の質を高めていくことで、チーム学校として成長していくことが、益々求められてくると考える。

そこで、教員等のリフレクティブ・マネジメントを支え高めていくものとしても有効な、公開保育を活用した自己評価支援システムの普及を来年度以降も図っていくが、システムの質を向上させるためには、公開保育コーディネーターの質の向上が不可欠である。公開保育コーディネーターがリフレクティブ・マネージャーのモデルとしての役割を果たしていることからも、今後はコーディネーター養成プログラムの改善や、認定者に対するフォローアップ研修の充実が必要であると考える。また、公開保育を活用した自己評価支

援システムの概要や効果について、わかりやすくまとめたリーフレットを作成し、全国の幼稚園等に配布することで、幼稚園等における学校評価の推進を図っていきたい。

幼児教育の質の評価のための人材育成については、今年度、評価者育成研修会を実施し、教育・保育の質を評価する評価者に求められる資質・能力に関することや、これまでに開発されているいくつかの教育・保育の質の評価尺度について学んだ。

今後は、教育・保育のプロセスの質の評価を重視しつつ、教育・保育全般を評価するための指標について検討し明確化するとともに、評価者としての資質・能力を高めていくための研修プログラムを改善し、研修を重ねていくことが大きな課題である。

■私立幼稚園における学校評価実施支援システムに関する研究検討委員会

田中　雅道	京　都・光明幼稚園
安家　周一	大　阪・あけぼの幼稚園
宮下友美恵	静　岡・静岡豊田幼稚園
加藤　篤彦	東　京・武蔵野東第二幼稚園
川原恒太郎	大　分・ひまわり幼稚園
藪　　淳一	北海道・大通幼稚園
小野寺靖子	宮　城・しげる幼稚園
高倉　幸世	千　葉・コスモス幼稚園
佐藤　緑郎	埼　玉・大宮みどりが丘幼稚園
西片紀美子	長　野・松本光明幼稚園
磯野　おわ	愛　知・国風第三幼稚園
濱名　　浩	兵　庫・立花愛の園幼稚園
水原　紫乃	広　島・焼山こばと幼稚園
岡本　和貴	徳　島・わかくさ幼稚園
淵　　和子	福　岡・霧ヶ丘幼稚園
吉井　　健	鹿児島・認定こども園信愛こどもの園
岡本　潤子	青　森・千葉幼稚園
亀ヶ谷忠宏	神奈川・宮前幼稚園
安達　　譲	大　阪・せんりひじり幼稚園
黒田　秀樹	福　岡・きらきら星幼稚園
秦　　賢志	兵　庫・はまようちえん

■協力者

岡　　健	大妻女子大学教授

本報告書は、文部科学省の「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」の委託費による委託業務として、公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が実施した平成 28 年度幼児期の教育内容等深化・充実調査研究の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。